

2022年 京都キリスト召団聖日集会 講筵要旨見出し

- 2022年1月9日 「主の祈り」に生きる
- 2022年1月16日 「祈りて願うことは既に得たりと信ぜよ、さらば得べし」
- 2022年1月23日 「生命の御霊の法」に生きる（ロマ書8章18～39節）
- 2022年1月30日 「望むところを確信し、見ぬ物を真実とする」
- 2022年2月6日 「天国人として生きる」（ピリピ書より）
- 2022年2月20日 「神の奥義なるキリスト、栄光の望み」（コロサイ書1～2章）
- 2022年2月27日 「天上人として生きる」——コロサイ書第2回——
- 2022年3月6日 「御霊による一致」——エペソ書の焦点——
- 2022年3月13日 「祈りの書・詩篇より」
- 2022年3月20日 「キリスト道（キリストの福音）の原点
- 2022年3月21日 2022年 復活節集会のご案内
- 2022年3月27日 「まず神の国と神の義とを求めよ」
- 2022年4月3日 「恵福なるかな、霊の貧しき者」
- 2022年4月10日 「天の父の全きが如く全かれ」
- 2022年4月17日 「キリストのもたらされたもの」
- 2022年4月24日 「み言葉と共なる生活」
- 2022年5月1日 「神の護りと導き」（その1）——イザヤ書40章～44章
- 2022年5月8日 「神の護りと導き」（その2）——イザヤ書45章～48章
- 2022年5月15日 「神の護りと導き」（その3）——イザヤ書49章～51章
- 2022年5月29日 「聖霊降臨節を前にして」
- 2022年6月5日 「聖霊降臨の記念の日に」
- 2022年6月19日 「み言葉と祈り」（詩篇より）
- 2022年6月22日 京都キリスト召団 夏季福音特別集会のご案内
- 夏季福音特別集会（京都）宿泊等の申込みのご案内
- 2022年6月26日 「人生は神讚美」
- 2022年7月3日 「新約聖書および詩篇（文語聖書）における「されど」
- 2022年7月10日 「我を食らい、我を飲め」（ヨハネ伝6章）
- 2022年7月17日 「神讚美の人生」（詩篇より）
- 2022年7月24日 「見ずして信する者は恵福なり」
- 2022年7月31日 「望むところを確信し、見ぬものを真実とする」
- 2022年8月7日 「夏季特別集会（京都）に御参加の皆様へ」
- 2022年9月18日 「ヨハネ伝3章～6章…そのダイナミックな展開を追う」



- 2022年10月2日 「天国人として生きる」
- 2022年10月16日 「わが生（生命、生活、人生）の原点」
- 2022年10月23日 「新約聖書は神（キリスト）からのラブレター、旧約はその予告編」
- 2022年10月30日 「神讚美の人生を！」
- 2022年11月6日 「主が家を建てられるのでなければ」
- 2022年11月13日 「永遠の生命に生きる」
- 2022年11月20日 「詩篇の「祈り」の更なる展開を！」
- 2022年11月27日 「どん底で担い給う主キリスト」
- 2022年12月4日 「望みて喜び、患難に耐え」（ロマ書12章12節）
- 2022年12月11日 「真の食物」（ヨハネ伝より）
- 2022年12月18日 「十字架を負って生まれ給うた御子キリスト」



「主の祈り」に生きる (新年集会)

2022年1月9日

「主の祈り」は、マタイ伝福音書第5章以下の、いわゆる「山上の垂訓」の中で、「祈り」の在り方について教えられた箇所で示されたものです。その「祈り」の前提として主キリストが語っておられることは、天界に居られる「父なる神」は、我々が祈る前から、我々が必要としているものを、全てご存知である、したがって、我々の必要を充たしてください、との揺るぎない信頼(確信)です。だからこそ、我々自身の事を願い求めるよりも前に、まず、御名(聖名)が聖なるものとして崇められるようにと祈ることを奨めておられるのです。即ち、

① 御名(みな)の崇められんことを、

② 御国(みくに)の来らんことを、

③ 御意(みこころ)の天において成っている如く、地においても成るように。

と、これらは「神ご自身」に関わることであり、それを先ず祈るようにと勧められた後に、我々自身に関する事柄を祈るようにと奨めておられます。その内容は、

(ア) 我らの日用の(日ごとの)糧(かて)(食物)を今日も、お与えください。

(イ) 我らに負債(おひめ)の在る者の負い目を免除しましたので、あなた(神)に対する我々の負債(おひめ)をも免除してください。

(ウ) 我らを試練に遭わせず、悪(悪しき者)から救い出してください。

というものです。転じて、神の側では我々の事をどのようにに観ておられるかを見ると、

(あ) 「わたしはこの民をわたしのために造った」(イザヤ書43章21節)

(い) 「イスラエルよ、あなたはわたしの僕、わたしはあなたを形づくり、わたしはあなたを背(そむ)きを雲のように 罪を霧のように吹き払った。わたしに立ち帰れ、わたしはあなたを贖(あがな)った」(同44章21〜22節)

このように、神に創造され、神の栄光を顯すようにとの使命を授かりながら、自我(自己)中心の生き方)に妨げられて呻吟(しんぎん)している私達を、本来の在るべき姿(相)へと回復してくださったのが、主イエスであり、私達の背きの罪を、ご自身の十字架上の死をもって贖い切り、上記の(あ)(い)を成就してくださったのです。そして、私達の目指すべき在り方の指針として、次の二つの掟(おきて)を提示されました。即ち、

① 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神である主を愛すること、

② 隣人を自分のように愛すること(マタイ伝22章37〜40節、マルコ伝12章29〜31節、ルカ伝10章25〜28節)。

この①は、「主の祈り」の①②③と共通であり、②は、「主の祈り」の(イ)に通ずるものだと言えます。要は、私達は、

「まず神の国と神の義を求めて生きる」

聖意体现者としての生き方を貫くようにと召された者であり、その実現を祈り求めて行く者、であります。



祈りて願うことは既に得たりと信ぜよ、さらば得べし

2022年1月16日

主イエスが「山上の垂訓」（マタイ伝福音書5章以下）の中で、祈りについて、

「汝らの父は求めぬ前に、汝らの必要な物を知り給う」

が故に、「斯く祈れ」と、「主の祈り」を教えられ、更に、飲食物や衣類のことで思い煩わないように、そして何よりも、まず神の国と神の義とを求めるべきことを命じられました。伝道の旅路の終りには、

「凡て祈りて願うことは、既に得たりと信ぜよ、さらば得べし。」（マタイ伝21章22節、マルコ伝11章24節）

と。わたしたちキリスト信徒の特権は、「祈り求めることを許されている」、いや、それ以上に、「祈り求めよ」と促されている。だから、「祈り求めるべきである」、ということです。そして、

「祈り求めたこと、願った事は、既に聴かれた、聴かれている」

と信ずるようになると命じられています。ただし、祈った事、願った事が「聴かれた、聴かれている」とは、祈ったこと、願った事が、その通りに成就する、その通りに実現すると言うことではありません。いつ、どのような形で、どのような内容の「応答」があるかは、誰にもわかりません。確かな事は、「祈り」は主キリストの許に届いていること、「祈ること」を許されているのは、自分が立派な人間であるからではなく、主キリストの十字架による贖い（贖罪）の故に、聖なる神（父なる神・霊なる神（父神・霊神）と御子キリスト）に祈ることが許されているということです。主イエスは、ルカ伝福音書18章において、

「落胆せずして常に祈るべきことを」

譬えを用いて教えられました。小池先生は、この箇所を引きながら、「祈りの本質」（1962年7月14日京都での講筵）において、「祈りの本質」とは、「祈らないではいられない」と言うことだと説いておられます。わたしたちにとって大切な事は、「主キリストと偕なる生活」を送ることであり、「み言葉・みたま（御霊）・祈り」は、ワンセットであると言うことです。肉体が空気を吸って生きているように、霊的存在者（霊止・ひと）にとつては、

「わが語りし言葉は、霊なり命なり」

と語られた通り、「み言葉・御霊」が糧です。ヨハネの第一の手紙では、

「我らが神に向いて確信する所は是なり、即ち御意に適うことを求めば、必ず聴き給う。かく求むるところ、何事にも聴き給うと知れば、求めし願いを得たる事を知るなり。」（5章14～15節）

と述べられています。パウロはピリピ書4章6～7節において、

「何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈りをなし、願をなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡て人の思いにすぐる神の平安は、汝らの心と思いとをキリスト・イエスによりて守らん。」

と励ましています。不安定な世の中、わたしたちは「祈りの特権」を賜わっている者らしく、常に前進して止まず、の気概をもつて貫きましよう！



「生命の御霊の法」に生きる（ロマ書8章18～39節）

2022年1月23日

ロマ書8章の冒頭においてパウロは、

「今やキリスト・イエスに在る者は罪に定められることがない。なぜなら、キリスト・イエスに在る『生命の御霊の法』は、あなたを『罪と死との法』から解放したからである。」

と宣言しています。私達は、現実の生活においては様々の苦難に遭遇します。もし、それらが私達の側に原因（「罪」）があつて、その結果なのだとすれば、そして、それ故、甘んじて受け入れる他ないのだとすれば、「やりきれない」思いに突き落とされます。主イエスの時代においても、「不幸」は「罪の結果」だと考えられていました。だから、ヨハネ伝9章において、道行くときに「生まれながらの盲人」を見た弟子たちは、この人が盲目で生れたのは「誰の罪の故か」と主イエスに尋ねています。それに対して主イエスは、

「この人の罪によるのでも、親の罪によるのでもない。ただ、神の業が彼の上に現れるためである」

とお答えになっています。この主イエスのお答えは、私達に大きな慰めと勇気とを与えてくれます。どのような不如意な出来事に遭遇しても、それを私達の「罪の結果」と見るのではなく、「神の御業（栄光）の顯れるため」であると肯定的に受け止めることが出来るようになります。パウロがロマ書8章26節以下で告白しているように、御霊の執り成しによつて、「凡ての事が相働きて益となる」ことを信ずることが出来るようになります。パウロは自らが体験した「患難、苦難、迫害、飢え、裸、危険、剣」を挙げながら、「凡てこれらの中に在つても、私達を愛してくださっている方（主キリスト）によつて、勝ち得て余りがある」と、そして、どんなものも、

「私達の主キリスト・イエスにおける神の愛から、私達を引き離すことは出来ないのである」

と高らかに勝利宣言をしてくれています（35～39節）。それだけではなく、

「ご自身の御子をさえ惜しまないで、私達凡ての者のために死に渡された方

（神）が、御子のみならず万物をも賜わらないことがあるうか」（32節）

とまで言ってくれています。『ご自身の御子を私達凡ての者のために死に渡された』とは、主キリストが私達凡ての者の罪を背負つて十字架に掛けられ、「贖罪の大業」を果してくださったことを指しています。主キリストの十字架上の死（贖い）の故に、私達は「罪と死の法」から解き放たれ、「生命の御霊の法」に生きる者とされました。主キリストの「十字架上の死」において、旧き我（生来の我）は葬り去られています。

「わたしはキリストと共に十字架に付けられた。生きているのは、もはや、（旧い）わたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられるのである。」（ガラテヤ書2章20節）

とある通りです。この新しい私（新生の我）を導いてくださるのは、「生命の御霊の法」であり、常に「平安」が伴います。



望むところを確信し、見ぬ物を真実とする

2022年1月30日

へブル書第11章の冒頭に、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」

とあります。キリスト信徒の特権は、「望み」を持つことが許されていることであり、その「望み」は神・キリストの約束（御言葉）に基づくものであるが故に、必ず実現（成就）します。この点で、人が抱く単なる「願望」とは異なります。人が願ったり、望んだりする事態（事柄）は将来の事ですから、不確定なものであつて実現するかどうかは、わかりません。これに反し、神・キリストの御心に適う事態を望む「望み」は、必ず実現・成就するものであるが故に、そのような「望み」を抱いて生きる（歩む）人生は、力強く明るい・豊かな人生だと言えるのではないのでしょうか？ ロマ書5章でパウロは、

「我らは）彼（キリスト）により信仰によりて、今立つところの恵みに入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。然のみならず患難をも喜ぶ。そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛われらの心に注げばなり。」

(2～5節)

と述べています。8章18節以下では、

「今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。」

「我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、共に苦しむことを。然のみならず、御霊の初めの実をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて、子とせられんこと、即ちおのが体の贖はれんことを待つなり。我らは望みによりて救はれたり、眼に見ゆる望みは望みにあらず、人その見るところをいかでなほ望まんや。我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。」

と苦難の彼方の栄光を望み見えています。「愛の讃歌」で有名なコリント前書13章では、愛は

「凡そ事忍び、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事耐ふるなり。……げに信仰と

希望と愛と、此の三つの者は限りなく存らん」

と「希望」の大切さを謳っています。

「今日も明日も次の日も我は進み往くべし。」（ルカ伝13章33節）

「天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎゆくことなし。」（同21章33節）

「イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも変り給うことなし。」（へブル書

13章8節）

との、前進して止まない壮なる主キリストを頂いている私達は、どんな事態に直面しても、決して屈することはありません。



天国人として生きる（ピリピ書より）

2022年2月6日

1 ピリピ書の背景——使徒行伝（使徒言行録）16章6節以下

ピリピでのルデヤとの出会い——主、ルデヤの心を開き、パウロの語る言葉を聞かせ給う。祈り場への途上でのパウロとシラスの受難。牢獄での夜、パウロとシラスの神讃美と大地震の発生——全囚人の縄目が解ける。囚人が逃走したものと誤信して、獄卒は自害しようとする。誰ひとり逃走者が居なかったことに、恐れおののいた獄卒はパウロとシラスの前に平伏し、

「われ、救はれん為に何をなすべきか」

と問う。それに対する二人の答え——

「主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救はれん」

獄卒の全家族がその夜、直ちにバプテスマを受け、神を信じて喜ぶ。

2 ピリピ書第1章より

「我は汝らの衷に善き業を始め給いし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給うべきことを確信す。」（6節）

「生くるにも死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給わんことを」

（20節）

3 第2章より

「汝ら、キリスト・イエスの心を心とせよ」（5節）

「汝ら、眩かす疑はずして、凡ての事を行へ」（14節）

「人は皆、イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む」（21節）

4 第3章より

「唯この一事を努む、後ろのものを忘れ、前のものに向ひて励み」（13節）

「我等の国籍は天に在り、我等は主イエス・キリストの、救主として其の処より来りたもうを待つ。彼は万物を己に服はせ得る能力によりて、我等の卑しき状の体を変えて、己が栄光の体に象らせ給わん。」（20～21節）

5 第5章より

「汝ら常に主にありて喜べ、我また言ふ、汝ら喜べ。主は近し。何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈りをなし、願ひをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。」（4～7節）

「我は如何なる状に居るとも、足ることを学びたればなり。我は、一切の秘訣を得たり。」（11～12節）



神の奥義なるキリスト、栄光の望み（コロサイ書1～2章）

2022年2月20日

前回までのピリピ書に続き、今回は、コロサイ書を取り上げます。目的は、前回の延長として、現世を超えた「天の次元」の消息を信受、体得して、如何なる状況、境遇にあっても、神・キリストから賜わる希望を保持して、神・キリスト讃美の日々を生きることです。今回は、第1章と第2章から、関連箇所を引用することに致します。

コロサイ書の第1章において、パウロとテモテは、コロサイの信徒の「信仰、愛、希望」を喜び、主イエス・キリストに対して感謝を捧げています（3～5節）。そして、

「絶えずあなたがたのために祈り求めているのは、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力とをもって、神の御旨を深く知り、主のみこころにながた生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行って実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。更にまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがって賜わるすべての力によって強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍び、光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせてくださった父なる神に、感謝することである。神はわたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆるしを受けているのである。」（9～14節）

と。そして、御子に関しては、天に在るものも、地に在るものも、すべて御子によって造られ、御子のために造られたのである、と（16節）。

「神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、そして、その十字架の血によって平和をつくり、」

「万物を彼によってご自分と和解させてくださったのである。」（19～20節）

本日の主題である「神の奥義なるキリスト、栄光の望み」については、第1章24節以下、及び、第2章において叙述されています。即ち、

「わたしは、神の言を告げひろめる務をあなたがたのために神から与えられているが、……その言の奥義は、……今や神の聖徒たちに明らかにされたのである。神は、彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである。」（1章24～27節）

「わたしが……どんなに苦闘しているか、わかつてもらいたい。それは彼らが、心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知るに至るためである。キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている。わたしがこう言うのは、あなたがたが、だれにも巧みな言葉で迷わされることのないためである。」（2章1～4節）

「キリストにこそ、満ちみちている いっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあつて、それに満たされているのである。」（9～10節）



天上人^{てんじょうびと}として生きる―コロサイ書第2回―

2022年2月27日

エペソ人への手紙（エペソ書）の第1章では、

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、神はキリストにあって、天上で霊のもろもろの祝福をもって、わたしたちを祝福し、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び、わたしたちに、イエス・キリストによつて神の子たる身分を授けるようにと、愛のうちにあらかじめ定めてくださった」（3〜5節）

とあります。そして、わたしたちは、

「先には自分の罪過と罪によつて死んでいた者であつたが、神は大きな愛をもって、そのような者をキリストと共に生かし、キリスト・イエスにあって共に甦えらせ、共に天上で座につかせてくださったのである。」（2章1〜6節、要約）

と。このように、わたしたちは、天の次元（霊の次元）において既に「新しい甦りの生命」を賜つた者として、それにふさわしい生き方をするようにと促されています。これと軌を一にして、コロサイ書3章1〜4節では、

「あなたがたはキリストと共に甦えられたのだから、上にあるものを求めなさい。上にあるものを思うべきであつて、地上のものに心を引かれてはならない。あなたがたは、既に死んだ者であつて、あなたがたの生命^{いのち}は、キリストと共に神のうちに隠されているのである。わたしたちの生命であるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう。」

と力強く呼びかけられています。このようにわたしたちはこの世（現世）において既に「天上人（天国人）」として生きるようにと促されています。そして天上人の生きる次元は、自己中心的な「肉の生き方」ではなく、キリストが生きられたような「愛」を根底にした「霊の生き方」（コリント前書13章4〜7節）です。これを可能とするのは、イエス・キリストの十字架での死において、自己中心的な肉の我が既に葬られていることを信受し、新生の命を賜わっていることに感謝して、御霊に導かれて生きる生き方です。御霊の結ぶ実は、

「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」
であると（ガラテヤ書5章22〜23節）。コロサイ書でも、

「あなたがたは、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者であるから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい。互に忍びあい、もし互に責むべきことがあれば、ゆるし合いなさい。主もあなたがたをゆるしてくださったのだから」（3章12〜13節）

と。第4章では、

「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい。同時にわたしたちのためにも、神が御言のために門を開いてくださって、わたしたちがキリストの奥義を語れるように、また、わたしが語るべきことをはっきりと語れるように、祈ってほしい」（2〜4節）

と。このような、熱い呼びかけに、わたしたちも応えて、力強く歩んでゆきたいと、願います。



御霊による一致——エペソ書の焦点——

2022年3月6日

前は、コロサイ書第3章1〜4節を取り上げるに当たって、エペソ書第1章と第2章に言及しました。今回は、エペソ書全体を通しての焦点と言わなければならない事柄に焦点を絞って取り上げることと致します。それを次の二点において捉えたいと思います。その一つは、「二つのものを一つとする神の業」。もう一つは、「我等の戦い（霊戦）」第6章10〜20節。

I 二つのものを一つとする神の業

1 時の満ちるに及んで実現される御計画によって、神は天に在るもの、地に在るものを、ことごとく、キリストにあつて一つに帰せしめようとされた（1章9〜10節）。

2 キリストは十字架において、律法を廃棄し、「ユダヤ人（神の民）」対「異邦人」という対立（敵対）関係を廃棄して、

「彼（キリスト）にあつて、二つのものを、一人の新しい人に造り変えて平和を来らせ、十字架によって、二つのものを一つの体として神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまつたのである。」（2章15〜16節）

「彼（キリスト）によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあつて、父の御許に近づくことができるからである。そこであなたがたはもはや異邦人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである」（18〜19節）

パウロに示された「キリストの奥義」は、

「異邦人が福音によりキリスト・イエスに在つて わたしたちと共に神の国を継ぐ者となり、共に一つの体となり、共に約束にあずかる者となることである。」（3章6節）

3 御霊の賜う一致

「体は一つ、御霊は一つ。……一つの望みを目指して召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上に在り、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。」（4章4〜6節）

II 霊戦

「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、闇の世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。それだから、……神の武具を身につけなさい。即ち、立つて真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸に付け、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰の盾を手に取りなさい。……また、救いの兜をかぶり、御霊の剣、即ち、神の言を取りなさい。絶えず祈りと願いをし、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさまして倦むことなく、すべての聖徒のために祈り続けなさい。」（6章12〜18節）



祈りの書・詩篇より

2022年3月13日

前回までで、エペソ書、ピリピ書、コロサイ書を終えましたので、今回は、次への「間奏曲」の気持ちで、詩篇から日頃親しんでいる幾つかを取り上げたいと思います。

詩篇は、祈り心へと導いてくれる大切な「祈りの友」です。各自が置かれている状況の中で、慰めや共感、励ましを与え、自ずと「祈り心」へと導いてくれるように思います。時代も状況も全く異なる中で謳われ、受け継がれて来たものであるにもかかわらず、共感と親しみを覚えます。今回は、私が「いいな!」と思うものを、幾つか取り上げることといたします。なお、原文で「エホバ」とか「神」とある場合、「キリスト」とか「主キリスト」、「主」ないし「主様」と読み替えてください。

(1) 62篇、63篇より

「わが靈魂は黙してただ神を待つ。わが救いは神より出するなり。神こそはわが盤^いわが救いなれ、またわが高き櫓^{やぐら}にしなければ我いたくは動かされじ。民よ、いかなる時にも神に依り頼め、その聖^み前に汝の心を注ぎ出だせ、神は我等の避け所なり。」(62篇)

「ああ神よ、汝は我が神なり 我せちに汝を探ね求む、水なき乾き衰えたる地にあるごとく、わが靈魂は乾きて汝を望み、わが肉体は汝を恋ひ慕う。汝の慈しみは命にも勝れる故に、わが唇は汝を讃めまつらん。」(63篇)

(2) 68篇19〜20節

「日毎に我らの荷を負い給う主、我らの救いの神は讃むべきかな、神はしばしば我らを助けたまへる神なり。死より逃れ得るは主エホバに由る。」

(3) 127篇

「エホバ家を建て給うにあらずば、建つる者の勤労は空しく、エホバ城を守り給うにあらずば、衛士^{えじ}の醒^さめおるは空しきことなり。」

128篇

「エホバを畏^{おそ}れ、その道を歩む者は皆さいはひなり。そは汝おのが手の勤労を食らふべければなり。汝は福祉^{さいわひ}を得、また平安に居るべし。」

(4) 130篇

「ああエホバよ、我ふかき淵^{ふち}より汝を呼べり。主よ、汝もし諸々の不義に目を留め給はば、誰かよく立つことを得んや。されど汝に救ひあれば、人に畏れかしこまれ給うべし。我エホバを待ち望む、わが靈魂は待ち望む。我はその聖言^{みことば}によりて望みを抱く。」

(5) 139篇

「エホバよ、汝は我を探り、我を知り給えり。汝は我が坐るをも立つをも知り、また遠くより我が念^{おもひ}をもわきまへ給う。神よ、汝の諸々の聖念^{みおもひ}は我に尊きこととかばかりぞや。その聖念の総計^{すべくけり}はいかに多きかな。神よ、我を探りて我が心を知り、我が諸々の念を知り給え。」



キリスト道（キリストの福音）の原点

2022年3月20日

今年の復活節（4月17日）を迎えるに当たって、今一度、私達の信仰の原点を確認しておきたいと思います。大切な事は、私達一人ひとりと、主キリストとの関係を明確にして、それを私達（集会及び個人）の在り方の原点（出発点）とすることです。

ヨハネの第一の書3章16節には

「主は、わたしたちのためにいのちを捨ててくださった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。」

とあります。主イエス・キリストの十字架上の死、それは、わたしたち一人びとりの為であつたということ、このことを先ず、はつきりと自覚しておく必要があります。讃美歌136番1、2節を引用いたします。

「1 血しおしたたる 主のみかしら、とげにきされし 主のみかしら、なやみとはじに やつれし主を、われはかしこみ きみとおおぐ。」

2 主のくるしみは わがためなり、われは死ぬべき つみびとなり。かかるわが身に かわりましし 主のみこころは いとかしこし。」

使徒パウロは、ガラテヤ人への手紙において、

「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」

（19～20節）

と告白しています。以上のように、主キリストの十字架上の死が、わたしたち一人びとりの為の死（贖罪死）であり、それによって、わたしたちは罪無き者とされ、更には、主キリストの御復活の命を賜わつて、新しい命（永遠の命）に生きる者とされたからには、讃美歌136番3節にあるように、

「なつかしき主よ、はかり知れぬ 十字架の愛に いかに応えん。」

この身とたまを とこしえまで わが主のものと なさせたまえ。」

との祈りをもって、主キリストの御心にかなう生き方を貫くほかはない。これは、個々人にとってそうであるだけではなく、集会にとつても同様であります。別の言い方をすれば、個人にとつても集会にとつても、「何をなすべきか、どのようになすべきか」の判断基準を、「自分達が何をどのようにしたいか」ではなく、「主キリストは、何をどのようにすること望んでおられるか」に置くべきことを意味しています。そして、主の御心（かな）に合う生き方をするには、日々の生活が、「主キリストと偕なる生活」であること、新約聖書や詩篇に親しみ、それを「霊の糧」として食らい、「祈り、ないし祈り心」を保ち続けることが大切です。ここに書いたことは、世間の潮流とは全く異なる事ではありますが、「地の塩、世の光」としての役目を担っている私達の務めだと思えます。



2022年 復活節集会のご案内

2022年3月21日

今年の復活節集会を下記のとおり開催致します。

現在、新型コロナウイルス感染者は減少傾向にあるものの、まだまだ感染対策が必要な状態です。

そこで一定の感染予防措置を取った上、午前は奥田昌道先生に主の御復活に関し深く語っていただき、午後は昼食（黙食）をはさんで、1時間程度を感話会及び祈り会とします。

本日、全国で「まん延防止等重点措置」が解除され、今後、社会経済活動を日常に戻していく取り組みも始まります。私たちは、このような時にこそ、主の御復活の生命をいただき、御霊と能力との証明の事態を願っていく必要があります。参加の皆様には、マスクの着用や、席を空けての着席をお願いいたします。

皆様とともに、主キリストの御復活を心から讃美したいと考えます。

記

日時 4月17日（日） 10時30分～14時00分

会場 KKR 京都くに荘 4階比叡の間（上京区河原町通り荒神口上る東入る）

Tel. 075-222-0092

会費 無料（会場費・昼食費は京都キリスト召団にて負担いたします。）

日程

午前の部

講筵 10時30分～12時00分 奥田昌道先生

午後の部

（1）昼食（黙食） 12時15分～12時45分

（2）感話会及び祈り会 13時00分～14時00分

★参加御希望の方は、会場設営の関係上、4月8日（金）までに、電話、郵便又はメールで、参加者名、昼食の要否をお知らせください。



まず神の国と神の義とを求めよ

2022年3月27日

主イエス・キリストこそ、「神の国と神の義」との体現者である。故に、筵題の主キリストの言葉は、「まず、霊なる私（イエス・キリスト）を求めよ」と言うことである。

わたしたちは日々の生活において、朝目覚めた時、何を思い、何を願うであろうか？
いろいろの心配ごとや気にかかることがあるだろう。また、その日の仕事の事や為すべき課題が迫ってくることだろう。しかし、最も大切な事は、何はさておき、

「まず神の国と神の義とを求めよ」

と主キリストは論^{さと}しておられる。そして、「神の国と神の義」の体現者は、主キリストご自身であるから、「何はさておき、まず、わたし（主キリスト）を求めなさい」と言うことだ。

ヒルティは、『眠られぬ夜のために 第一部』の中で、

「朝、目ざめると同時に まっ先きに意識にのぼる考えが何であるかは、非常に大切である。その時あなたは……その時どきの「気分」に身をまかせるか、それともあなたの生活の手綱をしつかり自分で握るつもりだろうか。今日もまたさつき、目さきの心配や苦勞から始めるか、それとも新しい命の朝に対する感謝から始めるか。……どちらにするかで、その日の運命はきまるのである。」（1月22日）

また、イザヤ書30章15節と18節を引きながら、

「主は あなたに恵みを施される日を待っていられる。だから、あなたはいたずらに心配をしたり、いろいろ将来の計画を立てたりして、そのために、最もよい仕事の時間を多くつぶすことは全くいらない。神を信じて、神の道を誠実に歩もうと務めるならば、万事はひとりでに、しかもあなたが予期するよりも、はるかにうまく運ぶのである。これによつて人生は非常に楽になる。」（3月15日）

と語っている。

ここで主キリストが弟子たちに教えられた「主の祈り」に目を留めよう。その中で主は、

「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。だから、あなたがたはこう祈りなさい、天にいますわれらの父よ、御名^みがあがめられますように。御国がきますように。みこころが天に行われるとおりの、地にも行われますように。わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください。」（マタイ伝6章8〜11節）

現代は、様々な危機が平穩な生活を脅かしている。そうした状況の中で、わたしたちは、神の国の体現者として、主キリストの救いの証言者として、賜った使命を果して行くには、御霊の主キリストと一つとされて「我れキリストの中に、キリスト我が内に」の「一如一体」の霊的現実を祈りの中で賜り、それを身証して行く他にないであろう。



恵福なるかな、霊の貧しき者

2022年4月3日

筵題の「恵福なるかな、霊の貧しき者」は、いわゆる「山上の垂訓」の第一句である。

小池先生は、この句を、主イエスご自身の内面の告白として捉えられた。即ち、主イエスの在り方は、父なる神の前に「ご自身はゼロ」、ご自身を明け渡しておられた。そうすると、神が100%イエスの中に宿られた、だから、

「わたしを見た者は、父（なる神）を見たのだ」

と告白されたのだと。またご自身の為さった数々の不思議な御業も、神がイエスを通して（いわば、イエスを道具として用いて）為さった神ご自身の御業として父なる神に栄光を帰しておられた。私（奥田）は「霊の貧しい姿（相）」を「自分に依り頼むことの出来ない者」として捉えたい。自分自身に依り頼むことの出来る者、自信満々で堂々と力強く世渡りの出来る者は神に依りすぎる事をしない、その必要が無いからである。これに反して自分に依り頼むことの出来ない者（世の基準から見た「敗者」）にとっては、キリストの福音は、心の支えであり、「救い」である。マタイ伝9章10、13節の場面での主キリストの言葉

「健やかなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す。『われ憐憫を好み

て犠牲を好まず』とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、

罪人を招かんとて来たり。」

は、まさに「敗者復活戦」へと拾い上げて頂いた者に対する励ましの言葉である。同様に、

「凡て労する者・重荷を負う者、我（主イエス）に来たれ、我、汝らを休ません。

我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負いて我に学べ、さらば靈魂に休息を

得ん。わが軛は易く、わが荷は軽ければなり。」

も、何と慰め深い言葉であろうか。この言葉に接すると、詩篇46篇の

「神は我らの避け所また力なり、艱めるとききの最近き助けなり。」

が力強い応援歌として励ましを受ける。なお、人は如何にして神の前に「義」であることが出来るか（義人たり得るか）に関しては、ルカ伝18章9、14節の主イエスの譬えを挙げておきたい。祈る為に宮にのぼったパリサイ人と取税人の対比、即ち、パリサイ人は自分の道徳的・宗教的立派さを誇る姿、取税人は宮の外に

「遙かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ『神よ、罪人なる我を憐れみたまへ』」

とだけ祈った。これに対して主イエスは、

『我（イエス）汝らに告ぐ、この人（取税人）は、かの人（パリサイ人）より義とせられて、己が家に下り往けり。おほよそ、己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』

と語っておられる。ここに、キリストの福音の本質がよく表れている。



天の父の全きが如く全かれ

2022年4月10日

『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害をする者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らしてくださるからである。あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるうか。そのようなことは取税人でもするではないか。兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしているだろうか。そのようなことは異邦人でもしているではないか。それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。』（マタイによる福音書5章43〜48節）

主イエスは、ここで、「天の父である神」の完全性（完善性）を、太陽が万人を無条件に、無差別に照らし、生命づけている相において捉えられた。そして、人間の社会においても、同様であるようにと諭しておられる。人間社会においては、

「目には目を、歯には歯を」（同害報復）

は当然のことであり、感情的には「同害報復」ではなく、「倍返し」をしたいところを、「同害報復」で我慢することが求められているのである。これに対して主イエスは、

「悪人に手向かうな」

と言い、「求める者の求め」以上の事をして応じ、

「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」

と諭される。これは、通常の人間的感覚では、とても受け入れる事の出来ない「無理難題」を突き付けておられる、と言う他ない。現今の世界情勢を見ても、然りである。主イエスの論しの通りに行っていたのでは、悪をはびこらせ、悪を助長するだけである。実行不可能と思える主イエスの御言葉の重みは、ご自身がそれを実行された事にある。地上での主イエスの生涯は、「愛の実践」そのものであった。讃美歌121番の歌詞が主イエスの生涯を謳い上げている。

わたしたちに今出来ることは何であろうか？ 世界の平和のために祈る事は、もちろん、大切な事だろう。しかし、私は、それはそれとして尊重しつつも、なお、身近な事として、わたしたちが現実接する人たちの間において、主イエスの求めておられることが成就するように、実現するように心がけたい。具体的には、家族の間で、わだかまりや反発が生れないように、生れてしまった時は、それが解消するように、努めることである。まずは、心の中で、それが実現されていないと現実のものとはならないであろう。これが達成されて初めて、隣人間においても、それが実現されるであろう。「一隅を照らす」とは、そのような在り方ではないだろうか。愛の霊なる「主イエスの御霊」の導きを切望する。



キリストのもたらされたもの（復活節講筈）

2022年4月17日

1 イザヤ書11章の世界

①争いの無い世界（動物界においても）

②幼な子が大切にされている世界

「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び、その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を畏れる霊である。彼は主を畏れることを樂しみとし、その目の見るところによって、さばきをなさず、その耳の聞くところによって、定めをなさず、正義をもって貧しい者をさばき、公平をもって国のうちの柔和な者のために定めをなし、その口の鞭をもって国を撃ち、その唇の息をもって悪しき者を殺す。正義はその腰の帯となり、忠信はその身の帯となる。」

狼は子羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏し、子牛、若獅子、肥えたる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれ、雌牛と熊とは食い物を共にし、獅子は牛のように藁を食い、乳のみ子は毒蛇の洞に戯れ、乳離れの子は手を蝮の穴に入れる。彼らはわが聖なる山のどこにおいても、損なうことなく、破ることがない。水が海を覆っているように、主を知る知識が地に満ちるからである。」（イザヤ書11章1～9節）

2 死の克服 —— 「死」は最後のものではない。

キリストはご自身の「復活」の事態をもって、「死」が人間の「終り（最後）」ではないことを示された。地上での伝道においても、人々を「死」の悲しみから救われた事があった。

①ルカ伝7章11～17節 ナインの町で、ある寡婦の一人息子を死から救い出された。

「その後、間もなく、ナインという町へお出でになったが、弟子たちや大勢の群衆も一緒に行った。町の門に近づかれると、ちょうど、ある寡婦にとつて独り息子であった者が死んだので、葬りに出すところであった。大勢の町の人たちが、その母に付き添っていた。主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、『泣かないで居なさい』と言われた。そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいる者たちが立ち止まったので、『若者よ、さあ、起きなさい』と言われた。すると、死人が起き上がって物を言い出した。イエスは彼をその母にお渡しになった。人々はみな恐れをいだき、『大預言者がわたしたちの間に現れた』、また、『神はその民を顧みてくださった』と言って、神をほめたたえた。イエスについてのこの話は、ユダヤ全土およびその附近のいたる所にひろまった。」

②会堂司やイロの一人娘（12歳）を死から救い出された事（マルコ伝5章21～43節）



「イエスがまた舟で向こう岸へ渡られると、大勢の群衆がみもとに集まって来た。イエスは海辺におられた。そこへ、会堂司の一人であるヤイロと言う者が来て、イエスを見かけるとその足もとにひれ伏し、しきりに願って言った、『わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ。その子が治って助かりますように、お出でになって、手を置いてやってください』そこで、イエスは彼と一緒に出掛けられた。大勢の群衆もイエスに押し迫りながら、ついて行った。

(中略) ヤイロの処への途上、12年間も長血を患っていた女性がイエスの衣に触って癒された出来事があり、イエスと女性との問答が記されている。

イエスが、まだ話しておられるうちに、会堂司つかさの家から人々が来て言った。『あなたの娘は亡くなりました。このうえ、先生を煩わづらわすには及びますまい』。イエスはその話している言葉を聞き流して、会堂司に言われた、『恐れることはない、ただ信じなさい』。そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、誰にもお許しにならなかった。彼らが会堂司の家に着くと、イエスは人々が大声で泣いたり、叫んだりして騒いでいるのをご覧になり、内に入って彼らに言われた、『なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである』。人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所に入って行かれた。そして子供の手をとって、『タリタ、クミ』と言われた。それは、『少女よ、さあ、起きなさい』という意味である。すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。12歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。イエスは、だれにもこの事を知らすなど、きびしく彼らに命じ、また、少女に食物を与えるようにと言われた。」

③ マリヤとマルタの兄弟ラザロを甦よみがえらされた事 (ヨハネ伝11章1〜44節、要約)

「姉妹たちが人をイエスのもとに遣わしてラザロが病氣であることを知らせた。イエスは、それを聞いてからも、なお二日、その居られる場所に滞在された。それから、弟子たちに言われた、『わたしたちの友ラザロが眠っているわたしは彼を起しに行く』。すると弟子たちは言った、『主よ、眠っているのでしたら、助かるでしょう』。すると、イエスは彼らに言われた、『ラザロは死んだのだ。そして、わたしがそこに居合わせなかったことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである。では、彼のところに行こう』。さて、イエスが行ってごらんになると、ラザロは既に4日間も墓の中に置かれていた。マルタはイエスに言った、『主よ、もしあなたがここに居てくださったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう。し



かし、あなたがどんな事をお願いになっても、神は叶えてくださる事を、わたしは今でも存じています』。イエスはマルタに言われた、『あなたの兄弟は甦るであろう』。マルタは言った、『終りの日の甦りの時甦る事は、存じています』。イエスは彼女に言われた、『わたしは甦りであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか』。マルタはイエスに言った、『主よ、信じます。あなたがこの世に来るべきキリスト、神の御子であると信じております』。マルタはこう言ってから、帰って姉妹のマリヤを呼び、『先生がお出でになって、あなたを呼んでおられます』と小声で言った。これを聞いたマリヤはすぐ立ち上がって、イエスのもとに行った。(中略) イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをご覧になり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、『彼をどこに置いたのか』。(中略) イエスは、墓に入られた。それは洞穴であって、そこに石がはめてあった。イエスは言われた、『石を取りのけなさい』。ラザロの姉妹マルタが言った、『主よ、もう臭くなっております。四日も経っていますから』。イエスは彼女に言われた、『もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか』。人々は石を取りのけた。すると、イエスは目を開き、天に向けて言われた、『父よ、わたしの願いをお聞きくださったことを感謝します。あなたがいつでもわたしの願いを聞き入れてくださる事を、よく知っています。しかし、こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしを遣わされたことを、信じさせるためであります』。こう言いながら、大声で『ラザロよ、出て来なさい』と呼ばれた。すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出て来た。イエスは人々に言われた、『彼をほどこいてやって、歸らせなさい』

イエスがこれ等の御業を通して示された事は、決して、人間に「不老不死」を約束されたのではなく、人間は肉体の死をもって終る存在ではなく、「霊」の次元において生き続ける「霊的存在」であることを示されたのである。イエスご自身は、神の実在界(根源界)から、[現象界] (自然界) に降臨された方であった。その本質は、山上の変貌の場面において顕れている(マタイ伝17章1〜8節、マルコ伝9章2〜10節、ルカ伝9章28〜36節)。そのイエスが、あの十字架の苦しみ味わってくださったのは、ひとえに、本来、我々が受け取るべき神の審判を、身代わりに受け取ってくださったからである。

人間は、肉体の死をもって消滅する(無に帰する)存在者ではなく、「霊」の次元において存続し続ける「霊的存在」であること、その「霊の次元」は、光の世界(いのち)から闇の世界(死)まであって、人は、それぞれにふさわしい世界で存在し続けるといふ。



この世（現世）で肉親と死別しても、「霊の次元」（来世）において、必ず、再会することが出来るのである。そして、生前キリストに帰依^{きえ}していた者は、光の世界に入れていただけるのである、何と有難く、慰めに満ちたことであろうか！

十字架上で死を味わってくださった主イエス・キリストは、あの栄光の姿の「復活」の事態を通して、わたしたちにとつて、肉体の「死」が最後のものではなく、「死」の彼方に（死を突破して）輝く命の世界があることを示してくださった。「復活節」（イースター）は、まさに、この勝利を祝う記念日なのである。

3 大自然との調和、思い煩いからの解放

主イエスの福音の素晴らしさは、天然（自然）と調和していて、少しの「無理」も無い点である。

① 主の祈り

「天にいます われらの父よ、御名があがめられますように。御国が来ますように。御心が天に行われるとおり、地にも行われますように。わたしたちの日ごとの食物を、今日もお与えください。わたしたちに負債^{おいめ}のある者を赦しましたように、わたしたちの負債をも お許しください。わたしたちを試みに合わせないで、悪しき者からお救いください。」

②

「それだから、あなたがたに言うておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思い煩い、何を着ようかと自分の体のことで思い煩うな。命は食物にまさり、体は着物にまさるではないか。空の鳥を見るがよい。時々くことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は、彼らを養ってくださる。あなたがたは彼らよりも、遙かに優れた者ではないか。あなたがたのうち、だれが思い煩ったからとて、自分の寿命を僅^{わず}かでも延ばすことが出来るようか。また、なぜ、着物のことで思い煩うのか。野の花がどうして育っているか、考えてみるがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華を極めた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも、着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装^はつてくださるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくだらない筈^{はず}があるうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思い煩うな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存知である。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」



だから、明日の事を思い煩うな。明日の事は、明日自身が思い煩うであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。」（マタイ伝6章25～34節）

4 「愛」（赦しの大切さ）

『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていた事は、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らしてくださるからである。あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるのか。そのような事は、取税人でもするではないか。兄弟だけに挨拶をしたからとて、なんの優れた事をしているだろうか。そのような事は、異邦人でもしているではないか。それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者とならなさい。」（マタイ伝5章43～48節）

5 死人の復活について —— コリント前書15章のパウロの証言から

死人の復活について、

「朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに甦り、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに甦り、弱いもので蒔かれ、強いものに甦り、肉のからだで蒔かれ、霊の体に甦るのである。（中略）最初に在ったのは、霊のものではなく肉のものであつて、その後に霊のものが来るのである。第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。（中略）わたしたちは、土に属している形を取っているのと同様に、また天に属している形を取るであらう。（中略）わたしたちは、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、^{また}瞬く間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者に甦らされ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。」（15章42～53節）

6 自由の回復 —— ガラテヤ書5章1節

「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放してくださったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷の軛^{くび}につながれてはならない。」

パウロにとつての「奴隷の軛」とは、ユダヤ教の「律法主義による束縛」のことであつた。キリスト信徒それぞれに、真の自由を束縛する何かがあることだろう。それに対して、パウロは、信徒を励ましてくれているのである。



み言葉と共なる生活

2022年4月24日

主イエスは、

「人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。」（ヨハネ伝6章63節）

と語られました。また、

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言^{ことば}で生きるものである。」（マタイ伝4章4節）

と。イザヤ書55章では、

「渴いている者は、みな水に來たれ。あなたがたは來て、金を出さずに、ただで葡萄酒と乳とを買い求めよ。なぜ、あなたがたは、糧にもならぬもののために金を費やし、飽きることできぬもののために労するのか。わたしによく聞き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で自分を樂しませることが出来る。耳を傾け、わたしに來て聞け。そうすれば、あなたがたは生きることが出来る。（中略）あなたがたは主にお会いすることが出来るうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。惡しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に歸れ。そうすれば、主は彼に憐れみを施される。われわれの神に歸れ、主は豊かにゆるしを与えられる。わが思いは、あなたがたの想いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。天から雨が降り、雪が落ちてまた歸らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種まく者に種を与え、食べる者に糧をあたえる。このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに歸らない。わたしの喜ぶところのことを為し、わたしが命じ送った事を果す。あなたがたは喜びをもって出てきて、安らかに導かれて行く。（以下、略）」

と呼びかけられています。この呼びかけに應えるように、詩篇103篇では、

「わがたましひよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名をほめよ。わがたましひよ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病を癒し、あなたの命を墓から贖い出だし、慈しみと憐れみとをあなたに被らせ、あなたの生き長らえる限り、良き物をもってあなたを飽き足らせられる。こうしてあなたは若返って、鷺のように新たになる。（以下、略）」

と謳っています。現代は、外は不穩な国際情勢、内はコロナなど、私達の生存を危うくする事態が続きますが、

「あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穩やかにして信賴しているならば力を得る。」（イザヤ書30章15節）

とのみ言葉や、

「あなたがたは、この世では患難^{なやみ}がある。しかし、勇氣を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」（ヨハネ伝16章33節）

との主の御言葉に信賴して、勝利の日々を送りたいと願います。



神の護りと導き（その1）——イザヤ書40章～44章——

2022年5月1日

イザヤ書40章以下では、広大無辺な世界が展開されています。

「慰めよ、わが民を慰めよ」

に始まり、

「荒野に主の道を備え、砂漠に我々の神のために、大路を真っ直ぐにせよ。諸々の谷は高くせられ、諸々の山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光が顕れ、人は皆ともにこれを見る。これは主の口が語られたのである。」

この呼びかけは、あたかも、先の戦争（太平洋戦争）によって、壊滅の焼土と化した日本に対する「励ましの声」として響く（当時まだ中学生だった私には、知る由も無かったが）。

「人は皆、草だ。その麗しさは、すべて野の花のようだ。主の息（審判、裁き）がその上に吹けば、草は枯れ、花はしぼむ。しかし、我々の神の言葉（救いの福音の言葉）は、永久に変わることはない。……主は牧者のようにその群れを養い、その腕に子羊を抱き、その懐に入れて携え行き、乳を飲ませている者を優しく導かれる。」（イザヤ書40章1～11節）

「ヤコブよ、何ゆえあなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。イスラエルよ、何ゆえあなたは、『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか。……主は永久の神、地の果ての創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵は測りがたい。弱った者には力を与え、勢いの無い者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たな力を得、鷲のように翼をはって、昇ることが出来る。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない。」（40章27～31節）

1966年（昭和41年）4月に現住所（鴨川のほとり）に引っ越してきた私は、ほとんど毎日、早朝に片道2.5キロの「哲学の道」まで走って行き、其処から500メートルほどの山道を登り、新島襄の墓地のある所から少し先の木立に囲まれた所を見つけ、「祈りの場所」とし、讃美歌を歌い、聖書を読み、大声で祈るひとときを持った。1969年（昭和44年）に始まった大学紛争の最中は特に、日々、主キリストの「護りと導き」を必要としていた。これは私にとって「祈りの原点」となった。

イザヤ書41章8～16節、

「しかし、わがしもべイスラエルよ、わたしの選んだヤコブ、わが友アブラハムの子孫よ、わたしは地の果から、あなたを連れてき、地のすみずみから、あなたを召して、あなたに言った、「あなたは、わたしのしもべ、わたしは、



あなたを選んで捨てなかった」と。恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。見よ、あなたにむかつて怒る者はみな、はじて、あわてふためき、あなたと争う者は滅びて無に帰する。あなたは、あなたと争う者を尋ねても見いださず、あなたと戦う者は全く消えうせる。あなたの神、主なるわたしはあなたの右の手をとってあなたに言う、「恐れてはならない、わたしはあなたを助ける」。主は言われる、「虫にひとしいヤコブよ、イスラエルの人々よ、恐れてはならない。わたしはあなたを助ける。あなたをあがなう者はイスラエルの聖者である。見よ、わたしはあなたを鋭い歯のある新しい打穀機とする。あなたは山を打って、これを粉々にし、丘をもみがらのようにする。あなたがあおげば風はこれを巻き去り、つむじ風がこれを吹き散らす。あなたは主によって喜びイスラエルの聖者によって誇る。」

42章1～13節、

「わたしの支持するわがしもべ、わたしの喜ぶわが選び人を見よ。わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道をしめす。彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさせず、また傷ついた草を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす。彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する。海沿いの国々はその教を待ち望む。天を創造してこれをのべ、地とそれに生ずるものをひらき、その上の民に息を与え、その中を歩む者に霊を与えられる主なる神はこう言われる、「主なるわたしは正義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手をとり、あなたを守った。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの光として与え、盲人の目を開き、囚人を地下の獄屋から出し、暗きに座する者を獄屋から出させる。わたしは主である、これがわたしの名である。わたしはわが栄光をほかの者に与えない。また、わが誉を刻んだ像に与えない。見よ、さきに預言した事は起った。わたしは新しい事を告げよう。その事がまだ起らない前に、わたしはまず、あなたがたに知らせよう」。主にむかつて新しき歌をうたえ。地の果から主をほめたたえよ。海とその中に満ちるもの、海沿いの国々とそれに住む者とは鳴りどよめ。荒野とその中のもろもろの町と、ケダルびとの住むもろもろの村里は声をあげよ。セラの民は喜びうたえ。山の頂から呼ばわり叫べ。栄光を主に帰し、その誉を海沿いの国々で語り告げよ。主は勇士のように出て行き、いくさ人のように熱心を起し、ときの声をあげて呼ばわり、その敵にむかつて大能をあらわされる。」



特に43章1～7節、同21節、25節。

「ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、「恐れるな、わたしはあなたをあがなつた。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にいる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。わたしはあなたの神、主である、イスラエル¹の聖者、あなたの救主である。わたしはエジプトを与えてあなたのあがないしろとし、エチオピアとセバとをあなたの代りとする。あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛するがゆえに、あなたの代りに人を与え、あなたの命の代りに民を与える。恐れるな、わたしはあなたと共にいる。わたしは、あなたの子孫を東からこさせ、西からあなたを集める。わたしは北にむかつて『ゆるせ』と言ひ、南にむかつて『留めるな』と言ふ。わが子らを遠くからこさせ、わが娘らを地の果からこさせよ。すべてわが名をもつてとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた。」

「この民は、わが^{ほまれ}譽を述べさせるためにわたしが自分のために造つたものである。」

「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。」

44章21～23節。

「ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事を心にとめよ。あなたはわがしもべだから。わたしはあなたを造つた、あなたはわがしもべだ。イスラエルよ、わたしはあなたを忘れない。わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなつたから。天よ、歌え、主がこの事をなされたから。地の深き所よ、呼ばわれ。もろもろの山よ、林およびその中のもろもろの木よ、声を放って歌え。主はヤコブをあがない、イスラエルのうちに栄光をあらわされたから。」

イザヤ書の「恵みの預言」を主キリストは、実現してくださつた。今も、「みたまのキリスト」として、傍近くに御臨在くださり、ガリラヤ湖上で漕ぎ悩む弟子たちの所に歩みより、

「心安かれ、我なり、^{おそ}懼るな」

と励まされた（マルコ伝6章45～52節）ように、人生の旅路において行き悩む我々を助け、励まし続けてくださっているのである。



神の護りと導き（その2）——イザヤ書45章～48章——

2022年5月8日

今回は、前週に引き続き、イザヤ書から「み言葉」を頂きます。
45章では、ペルシヤ王クロスに対して次のように言われる。

「わたしはあなたの前に行つて、諸々の山を平らにし、青銅の扉を壊し、鉄の貫の木を断ち切り、あなたに、暗い所にある財宝と、ひそかな所に隠した宝物とを与えて、わたしは主、あなたの名を呼んだイスラエルの神であることを知らせよう。わがしもべヤコブのために、わたしの選んだイスラエルのために、わたしはあなたの名を呼んだ。あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたに名を与えた。わたしは主である。（中略）わたしは光をつくり、また暗きを創造し、繁栄をつくり、また禍を創造する。わたしは主である。すべてこれらの事を為す者である。天よ、上より水を注ぎ、雲は義を降らせよ。地は開けて救いを生じ、また義をも、生えさせよ。主なるわたしはこれを創造した。」（2～9節）。

46章では、

「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残つたすべての者よ、生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。（中略）心をかたくなにして、救いに遠い者よ、わたしに聞け。わたしはわが救いを近づかせるゆえ、その来ることは遠くない。わが救いは遅くない。わたしは救いをシオンに与え、わが栄光をイスラエルに与える。」（3～13節）

「見よ、わたしはあなたを練つた。しかし銀のようにではなくて、苦しみの炉をもつてあなたを試みた。わたしは自分のために、自分のためにこれを行ふ。」（48章10～11節）

「あなたの贖い主、イスラエルの聖者、主はこう言われる、『わたしはあなたの神、主である。わたしは、あなたの利益のために、あなたを教え、あなたを導いて、その行くべき道に行かせる。どうか、あなたはわたしの戒めに聞き従うように。そうすれば、あなたの平安は川のように、あなたの義は海の波のようになり、あなたの末は砂のように、あなたの子孫は砂粒のようになって、その名はわが前から断たれることなく、滅ぼされる事はない。』」（48章17～19節）

これらの預言の言葉は、直接的にはイスラエル民族に対して語られたものですが、今や、万民の救い主である主キリストの恵みの御業を通して、私達にも直接に語りかけられている「恵みの言葉」として受け取ることが出来ます。わたし（奥田）には、46章3～4節

「生れ出た時から、わたしに負われ、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」

との言葉が、本当に有難いです。



神の護りと導き（その3）——イザヤ書49章～51章——

2022年5月15日

今回も、前週に引き続き、イザヤ書から「み言葉」を頂きます。

イザヤ書において語られている内容は、時にはイスラエル民族に対する叱責であったり、将来の祝福の約束であったり、後に主キリストが現れ給うことの預言であったり、と様々ですが、それらを通して、現代の私達が何を汲み取り、どのように生きるべきかの「指針」を得たいと思います。

「海沿いの国々よ、わたしに聞け。もろもろの民よ、耳を傾けよ。主はわたしを生れ出た時から召し、わが名を語り告げられた。……『あなたはわがしもべ、わが栄光を現すべきイスラエルである』と」（49章1～3節）。

ここでの「わたし」を私達、主キリストに救われ、召された一人びとりである、と受け取ります。

「主はこう言われる、『わたしは恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。わたしは捕えられた人に『出よ』』と言ひ、暗きにおる者に『現われよ』』と言う。彼らは飢えることがなく、渇くこともない。彼らを憐れむ者が彼らを導き、泉のほとりに彼らを導かれるからだ。天よ、歌え、地よ、喜べ。諸々の山よ、声を放つて歌え。主はその民を慰め、その苦しむ者を憐れまれるからだ。』（49章8～13節）

「『義を追い求め、主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴とを思いみよ。……わが民よ、わたしに聞け。律法はわたしから出、わが道は諸々の民の光となる。わが義は速やかに近づき、わが救いは出て行つた。義を知る者よ、心の内にわが律法を保つ者よ、わたしに聞け。人のそしりを恐れてはならない。彼らのものしりに驚いてはならない。彼らは衣のように、しみに食われ、羊の毛のように虫に食われるからだ。しかし、わが義はとこしえに長らえ、わが救いはよろず代に及ぶ』。主のかいなよ、覚めよ、覚めよ、力を着よ。……主に贖われた者は、歌うたいつつ、シオンに帰つて来て、その首に、永久の喜びをいただき、彼らは喜びと楽しみとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。『わたしこそあなたを慰める者だ。あなたは何者なれば、死ぬべき人を恐れ、草のようになるべき人の子を恐れるのか。……わたしはあなたの神、主である。……わたしはわが言葉をあなたの口に置き、わが手の陰にあなたを隠した。』」

こうして、わたしは、あなたはわが民であると言う。』（51章1～16節）

今日の世界情勢をみると、大国の横暴の前に苦しむ国々の人たちが、イザヤ書において顕わされている「慰めと励ましの恵みの言葉」によって、力づけられ、希望を失うことなく日々を過ぎられるようにと、願つてやみません。日本の人たちも、聖書において語られている啓示の言葉に、耳を傾けて欲しいと切望致します。



聖霊降臨節を前にして

2022年5月29日

今年の「聖霊降臨記念日（ペンテコステ、五旬節）」は6月5日（日）ですが、それを前にして、私達は祈りを深め、その日を迎えたく願います。

主イエス・キリストの救いの御業は、

「十字架（贖罪）↓ 復活（死に対する勝利）↓ 昇天 ↓ 聖霊の降臨」

へと展開します。私達にとって現実的に最も重要なのは、「聖霊の降臨」です。「現実的に」と表現したのは、「根源的」には「十字架による贖罪」が最も重要ですが、日常生活を送る上では、主キリストが「聖霊（御霊）」の相^{すがた}で、私達一人びとりに内住し、包み込み、担ってくださることが不可欠だからです（「我キリストの内に、キリスト我が内に」「エン・クリスト」）。使徒行伝（使徒言行録）によると、復活の主キリストは、四十日の間、しばしば弟子たちに現われて、神の国の事を語り、また、命じられたことは、エルサレムに留まって、父なる神の約束である「聖霊のバプテスマ」を受けることでした。彼らは十日間、熱心に祈り続けました。そして五十日目（五旬節の日）に火のように聖霊が降ったのでした（1章と2章）。主キリストは伝道の途上、

「我は火を地に投ぜんとて来たり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマあり（十字架のこと）。その成し遂げらるるまでは、思い逼ること如何ばかりぞや。」

と胸中の思いを告白しておられます。人間に聖霊の命を与えて、真に人を生かすためには、その前提として、人の罪が贖われなければならない。しかし、人が自らそれを為すことはできない。主イエスご自身が、万人の罪を背負って、十字架に架けられ、その死をもって罪の贖い（贖罪）を成す以外に道は無い、と言う厳しい定め^{きまり}に思いを巡らしての告白だと受け取ります。使徒パウロは、主キリストの贖罪の恵みを信受して、

「我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信するに由りて生くるなり。」（ガラテヤ書2章20節）

と告白しています。聖霊降臨の記念日を前にして、私達は日々の祈りを大切にし、一人ひとりに、そして集会全体に聖霊の火が熱く燃えてくださるようにと祈りたく願います。



聖霊降臨の記念の日に

2022年6月5日

今年は6月5日が「聖霊降臨の記念日」(ペンテコステ、五旬節)です。この日を迎えるに当たって、今一度、主キリストの熱き御思いと御言葉とを全身全霊をもって受け取り、それにお応えしたいと願います。

①ヨハネ伝14章16節～29節(抜粋)

「わたしは父にお願いしよう。父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと偕に居らせてくださるであろう。それは真理の御霊である。あなたがたはそれを知っている。それはあなたがたと偕に居り、またあなたがたの内に居るからである。わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに戻って来る。もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかしあなたがたはわたしを見る。わたしが生きるのであなただがたも生きるからである。その日には、わたしはわたしの父に居り、あなたがたはわたしに居り、またわたしがあなたがたに居ることが分かるであろう。わたしの戒めを心に抱いてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身を現すであろう。」「もし誰でもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。」「これらのことは、あなたがたと一緒に居た時、既に語ったことである。しかし、助け主、即ち、父がわたしの名によって遣わされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしが話しておいたことを、ことごとく、思い起こさせるであろう。わたしは平安をあなたがたに遺して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」

②ヨハネ伝16章7節～15節

「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主は来ないであろう。もし行けば、それをあなたがたに遣わそう。それが来たら、罪と義と裁きについて、世の人の目を開くであろう。」

「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるで



あろう。」

③ヨハネ伝20章19節～23節 「聖霊を受けよ」

「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめてしていると、イエスはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう。」

④使徒行伝1章3節～9節 「聖霊のバプテスマ」の予告

「イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう。」

さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエスに問うて言った、「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。」

⑤使徒行伝2章1節～4節 聖霊の降臨

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。」



み言葉と祈り（詩篇より）

2022年6月19日

私達の日常生活をしつかりと支えてくれるのは、「み言葉」を土台とした「祈り」です。旧約聖書の「詩篇」は、「讚美」と「祈り」の書と言えると思います。当時の人々の率直な祈りの心が素直に謳われていて、私達の心を励まし、慰め、勇気を与えてくれるように思っています。その幾つかを拾い上げたいと思います。「エホバ」とあるのは、「主」と読み替えます。

① 主よ、汝は我を囲める盾、わが榮え、わが首をもたげ給うものなり。われ臥していね（眠り）、また目さめたり、主われを支へたまへばなり。（第3篇）

② 汝のわが心に与へたまひし歡喜は、かれらの穀物と酒との豊かなる時にまさりき。われ安然にして臥し、また眠らん、主よ我を独りにて坦然に居らしむる者は汝なり。（第4篇）

③ もろもろの天は神の榮光を表し、大空はその聖手の所作を示す。語らず言はず、その声聞えざるに、その響きは全地に遍く、その言は地の極にまで及ぶ。

主の法は全くして靈魂を生きかへらしめ、主の証しは堅くして、愚かなる者を智からしむ。（第19篇）

④ 主はわが光わが救ひなり、わが命の力なり。われ主の幕屋にて歡喜の供え物を捧げん。われ謳ひて主を讚めたたへん。……主を待ち望め、雄々しかれ、汝の心を堅うせよ、必ずや主を待ち望め。（第27篇）

⑤ われ靈魂を汝の聖手に委ぬ、主まことの神よ、汝は我を贖ひたまへり。……わが時は すべて汝の聖手に在り。（第31篇）

⑥ 主は心の痛み悲しめる者に近く

して、靈魂の悔ひくずほれたる者を救ひ給う。義しき者は患難多し、されど主は皆その中より助け出したもう。主は彼がすべての骨を護り給う、その一つだに折らるることなし。（第34篇）

⑦ 汝の途を主に委ねよ、彼に依り頼まば之を成し遂げ、光のごとく汝の義を明らかにし、真昼の如く汝の訴えを明らかにし給わん。……人の歩みは主によりて定めらる、その行く途を主よろこび給えり。たとひその人たふることありとも、全く打ち伏せらるることなし、主かれが手を助け給えばなり。（第37篇）

⑧ 神は我らの避け所また力なり、悩める時のいと近き助けなり。汝ら静まりて我の神たるを知れ。（第46篇）

⑨ 第62篇、第63篇 「わがたましひは黙してただ神をまつ わがすくひは神よりいづるなり。神こそはわが磐わがすくひなれまたわが高き櫓にしあれば我いたくは動かされじ……」 「ああ神よなんじはわが神なり われ切になんじをたづねもとむ 水なき燥きおとろへたる地にあるごとくわが靈魂はかわきて汝をのぞみわが肉体はなんじを戀したふ……」

⑩ 第91篇 「至上者のもとなる隠れたるところにすまふその人は全能者の蔭にやどらん。われエホバのことを宣てエホバはわが避所わが城わがよりのむ神なりといはん……」

⑪ 第94篇17節、19節 「もしエホバ我をたすけたまはざりせば わが靈魂はとくに幽寂とてここに住ひしならん。されどわが足すべりぬといしとき エホバよなんじの憐憫われをささへたまへり。わがうちに憂慮のみつる時なんじの安慰わがた



ましひを喜ばせたまう」



夏季福音特別集会のご案内

2022年6月22日

京都キリスト召団では、8月27日（土）・28日（日）に、夏季福音特別集会を開催いたします。1泊2日の短期間の特別集会ですが、各召団が、そして各人が、御言葉・御霊を土台とした独立独歩の信仰の歩みを貫くことが出来るようにとの願いを込めて、御言葉を学び、祈りを深めたく存じます。「祈り」において大切な事は、

「自分が主キリストに何を願い、何を求めるか」

の前に、

「主キリストは何を願っておられるか、自分に対して何を求めておられるか」

を尋ね求めること、そして、

「主よ、どうか、あなたの御心（聖意）を示し、その成就のために、わたしを導き、

御用いください」

と祈ることです。

「主キリストが私達のために何を為してくださったか、何を求めておられるか、どのように生きることを願っておられるか」

は、第一には、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書において、次には、ロマ書、コリント前・後書、ガラテヤ書、エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ペテロ前・後書等において示されています。その観点から、読んで来て頂きたい箇所を掲げます。

ヨハネ伝14章～16章、ロマ書8章、ガラテヤ書2章20～21節、ルカ伝9章22～27節、マタイ伝7章13～14節、21節、24～27節、コロサイ書3章1～4節、9～17節、ピリピ書4章4～13節、ペテロ第一書1章3～9節、ヘブル書10章19節～11章1節、同13～16節、同13章、ヨハネ第一書3章～5章。

終りに、東京キリスト召団新宿集会、および、裾野キリスト召団からご参加くださる方々に対して、篤く御礼申し上げます。



2022年 夏季福音特別集会（京都）宿泊等の申込みご案内

夏季福音特別集会は、新型コロナウイルス感染拡大のため、2020年及び2021年の開催を見送りました。幸い、現在、感染者が減少傾向にありますので、本年は一定の感染防止措置を取った上、規模を縮小して開催することに致します。このため、前後3回の講筵を中心とし、感話会、懇親会の時間は取っておりません。参加の皆様には、マスク着用、必要以上の密集を避ける、食事中の黙食等をお願いする必要があります。上記をご理解の上、御配慮をお願いします。集会日程、会費、申込み方法等は以下のとおりです。参加御希望の方は、「参加申込書」に必要事項を記載の上、郵便又はメールでお申込みください。

【夏季福音特別集会の概要】 1、会場 〒602-0858 京都市上京区河原町通荒神口上る東入東桜町27-3 KKR 京都 くに荘（電話075-222-0092）。 2、講師 奥田昌道先生。 3、集会日程。 8月27日（土） 15時～受付。 15時30分～17時第1回集会。 17時30分～18時15分夕食。 19時～20時30分第2回集会。 8月28日（日） 6時30分～7時45分早天祈祷会（有志の参加、御所の予定）。 8時～8時45分朝食。 10時～11時30分第3回集会。 12時～13時昼食。 13時15分～解散。

【会費、申込み要領など】 4、会費（当日徴収）（1）宿泊される方。 ア、全参加（1泊2日、3食を全参加とします）。 大人（中学生以上）13,000円。 小学生6,000円。 幼児2,000円（2歳以下無料）。 イ、宿泊するものの、一部の食事が不要の方。 不要の食事に応じ適宜減額します。（不要の食事を申込書に記載ください。）（2）宿泊されない方（食事代の一部負担をお願いします） ア、8/27（土）夕食3,000円。 イ8/28（日）昼食1,500円。 5、申込みの方法など（1）申込み方法 別紙「参加申込書」に必要事項を記載の上、①又は②の方法でお申し込みください。 ①郵便で森満夫あて。 ②メールで森満夫あて。（2）申込期限 7月22日（土）必着。 注意 申込み後、万が一変更が生じた場合は、8月20日（日）迄に連絡願います。 8月21日以降の変更は受付できません。 同日以降の変更は、やむを得ない場合を除き、申込み分の支払いをお願い致します。（3）その他 ア、要望事項について（あれば、以下の点を参加申込書「要望事項」欄に記載ください。）（ア）洋室、和室の希望、一人部屋の希望。（イ）相部屋でもかまわない方は、「誰々さんと一緒なら」などと。（ウ）「バス付き」の部屋希望。（エ）その他、宿泊等に関し相談事があれば「森」までご連絡ください。

★感染防止の観点から、支障のない限り個室利用をお勧めします。 イ、受付完了のお知らせ。 メールで申し込まれた方には、返信メールでお知らせします。 返信メールが届かない場合はお知らせください。 郵便で申込みされた方には、適宜の方法でお知らせいたします。 ウ、各種お問い合わせ森満夫方で承ります。



人生は神讃美

2022年6月26日

詩篇第33篇1節に、

「義^{ただ}しき者よ、主によりて喜べ、讃美は直き者にふさわしきなり。」

とあり、103篇には、

「わが靈魂^{たましひ}よ主を讃めまつれ、わが衷^{うち}なる凡てのものよ、その聖^{きよ}き御名をほめまつれ。その凡ての恩恵^{めぐみ}を忘るるなかれ。」「主は汝のすべての不義^{ふぎ}をゆるし、汝のすべての病をいやし、汝の生命^{いのち}を滅亡^{ほろび}より贖^{いさな}ひだし、仁慈^{あわれみ}と憐憫^{あわれみ}とを汝に冠^{こう}らせ、汝の口を嘉物^{よきもの}にて飽^あかしめ給う。かくて汝は壮^{わか}やぎて鷺^{さぎ}のごとく新たになるなり。」

と謳っています。これを新約聖書の角度から見ると、「義しき者」とは主キリストの十字架の死による「贖罪の恵みに浴した者」であり、その者に賜わる聖霊が「新生の歓喜」と「神・キリスト讃美」とをもたらしてください。コリント後書5章17〜18節には、

「人もしキリストに在らば新たに造られたる者なり。古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり。これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己^{おのれ}と和^{やはら}がしめ、かつ和がしむる職^{つとめ}を我らに授^{さづ}け給えり。」

とある通りです。「罪の赦し（贖罪）」に関しては、ルカ伝7章36〜50節の記事を思い浮かべます。即ち、主イエスがあるパリサイ人に招かれて食卓に着いておられることを聞いた一人の女性が、

「香油の入った石膏の壺を持ってきて、泣きながら、イエスの後ろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛で拭い、そして、その足に接吻して、香油を塗った」

のを見たパリサイ人が、この女性を裁きの眼で見ていたのに対して、イエスは、この女性の愛による献身の姿に眼を留め、

「この女は多く愛したから、その多くの罪は赦されているのである。少しだけ赦された者は、少しだけしか愛さない。」

と語られました。私達は、主キリストの十字架の贖いの愛の御業を、どれだけ深く真剣に受け取っているでしょうか？ヨハネ第一書3章16節には、

「主は我らの為に生命を棄てたまへり。之によりて愛ということを知りたり、我らもまた兄弟の為に生命を棄つべきなり。」

とあります。自己愛の束縛から逃れられない私達は、パウロと共に、

「我キリストと偕に十字架に付けられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を棄て給いし神の子を信するに由りて生くるなり。」

と日々、告白して主キリストの御霊の導きに全托して歩むほかありません。この十字架の贖いと新生命の賦与という「無条件の恵み」の土台があつてこそ、私達は、感謝と讃美の日々を喜びをもつて送ることが出来るのだと思っています。



新約聖書および詩篇（文語聖書）における「されど」

2022年7月3日

文語文の新約聖書や詩篇において、「されど」という言葉が登場する場合には、それまでの状態や状況を覆して、新しい状況や境地が現われ、展開することが見られます。幾つかの例を挙げてみましょう。

① ルカ伝5章1節～11節 朝、ゲネサレ湖畔に立つておられたイエスが、シモン（ペテロ）の舟に乗り込み、岸から少し漕ぎ出させ、舟の中から群衆にお教えになった後、シモンに、

「深みに乗り出し、網を下して漁れ」

と言われた。シモンは、

「君よ、われら終夜^{よもすがら}労したるに、何もも得ざりき、されど御言^{みことば}に随^{したが}ひて網^{おろ}を下さん」

と答えて、その通りにしたところ、おびただしい魚の群れが入って、網が破れそうになった。そこで仲間に加勢するよう合図をし、彼らが来て魚を両方の舟一杯に入れたので、舟が沈みそうになった。これを見てシモン・ペテロは、イエスの膝もとにひれ伏して言った、

「主よ、我を去りたまへ。我は罪ある者なり」

と。

② 詩篇94篇17節～19節

「もし主われを助け給はざりせば、わが靈魂^{たましひ}はとくに幽寂^{おとなき}ところに住ひしならん。されどわが足すべりぬと言いしとき、主よ汝の憐憫^{あはれみ}われを支へたまへり。わがうちに思い煩いのみつる時、汝の慰めわが靈魂^{たましひ}を喜ばせたもう。」

③ ルカ伝22章では、21節、22節、26節、27節、32節、36節、42節に出て来ます。その中で、42節は最も深刻な事態における「されど」です。

「されど視よ、我を賣る者の手、われと共に食卓の上にあり、実に人の子は定められたる如く逝くなり。されど之を賣る者は禍害^{わざわい}なるかな」……されど汝らは然^{しか}あらざれ、汝等のうち大なる者は若き者のごとく、頭^{かしら}たる者は事^{つか}うる者の如くなれ。食事の席に著^つく者と事^{つか}うる者とは、何れが大なる。食事の席に著^つく者ならずや、されど我は汝らの中にて事^{つか}うる者のごとし。……されど我なんじの為に、その信仰の失せぬやうに祈りたり、なんじ立ち歸りてのち兄弟たちを堅^{ふくろ}うせよ……イエス言い給う『されど今は財布ある者は之を取れ、囊^{ふくろ}ある者も然すべし。また劍なき者は衣を賣りて劍を買へ。……』父よ、御旨^{みむね}ならば、此の酒杯^{さかずき}を我より取り去りたまへ、されど我が意にあらずして



御意の成らんことを願ふ』」

④ ロマ書5章8節、13節、15節、20節

「然れど我等がなほ罪人たりし時、キリスト我等のために死に給いしに由りて、神は我らに對する愛をあらはし給えり。……律法のきたる前にも罪は世にありき、されど律法なくば罪は認めらるること無し。……されど恩恵の賜物は、かの咎の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、まして神の恩恵と一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。……律法の来りしは咎の増さんためなり。されど罪の増すところには恩恵も彌増せり。」

⑤ ロマ書8章9節、21節、37節

「然れど神の御霊なんじらの中に宿り給はば、汝らは肉に居らで霊に居らん、キリストの御霊なき者はキリストに屬する者にあらず。……然れどなほ造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり。……されど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て餘あり。」

⑥ コリント後書3章5節、14節、16節

「されど」は何事をも自ら定むるに足らず、定むるに足るは神によるなり。……然れど彼らの心鈍くなれり。キリストによりて面帕の廢るべきを悟らねば、今日に至るまで旧約を讀む時その面帕なほ存れり。……然れど主に歸する時、その面帕は取り除かるべし。」

私達は人生の旅路において、様々な試練に見舞われます。そんな時、「されど！」と祈り心で聖名を呼び、御霊の主キリストに全托して乗り越えて行きましょう！



我を食らい、我を飲め (ヨハネ伝6章)

2022年7月10日

イザヤ書57章15節

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心を生かす。』」

このイザヤ書の御言葉に、キリストの福音の本質が佳く現よわれています。上記のイザヤ書では続けて、背きの民に向って

『わたしは彼の道を見た。わたしは彼をいやし、また彼を導き、慰めをもつて彼に報い、悲しめる者のために、くちびるの実を造ろう。遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ、わたしは彼をいやそう』と主は言われる。」

と語りかけます。このイザヤ書の御言葉を成就してくださったのは主キリストでした。聖であり義である神の前に立つことが出来ない「罪深い人間」の受けるべき当然の裁きを自らの身に引き受けて十字架に架かってくださった「砕けの姿(相)」に触れ、それを全存在で信受・体受することにより初めて「心砕けて、へりくだる者」とされた者(我々)の中にみたまの主さまは内住し、包み込み、担い上げてくださいます。こうして上記のイザヤ書の預言の言葉は成就し、我々を活かしてくださいます。このような「一体一如」の在り方を約束してくださっているのが、ヨハネ伝6章の「我を食らい、我を飲め」との御言葉です。ヨハネ伝6章では、ユダヤ人らとの問答の中で、繰り返し、主キリストが「命のパン」であり、このパンを食べる人は、決して死ぬことはない、と語られます。

「よくよく言っておく。人の子(イエスのこと)の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命は無い。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日に甦よみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしに居り、わたしもまたその人に居る。生ける父がわたしを遣わされ、また、わたしが父によって生きていくように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう。」(53〜58節)

このように繰り返し、「我を食らい、我を飲め」と語られたキリストと「一体一如」と言われた者には、聖霊の命が宿ることを語っておられるのが、7章37〜39節です。即ち、

「祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでも渴く者は、わたしの所に来て飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう。』これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。即ち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下つていなかったのである。」

主イエスは、十字架上で贖罪の御業を果してくださったので、主は「聖霊の姿(相)」で私達に臨んでくださり、常に共に居てくださっています。



神讚美の人生（詩篇より）

2022年7月17日

今回は、6月19日（日）の「み言葉と祈り」（詩篇より）の続編として、119篇から幾つかを選び出して味わいたいと思います。119篇は、「イロハ歌」と言われるように、アルハベットの順に詩が並べられています。その中で、すぐ思い浮かぶのは、

「汝の聖言はわが足の灯火、わが路の光なり。」（105）

「聖言うち披くれば光を放ちて、愚かなる者を慧からしむ。」（130）

ですが、以下では、順を追って幾つかを取り上げてみます。そして、主キリストや使徒たちの言葉では、これにどのように応対しているかを探ってみましょう。

①「わがたましひ痛めるによりて溶けゆく、ねがわくは聖言にしたがいて我に力を与えたまえ」（28節）↓

「凡て労する者・重荷を負う者、われに來たれ、われ汝らを休ません。」（マタイ伝11章25〜30節）

②「われ汝のいましめの道を走らん、その時汝わが心を広く為したもうべし」（32節）↓

「我は道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許に至る者なし。」（ヨハネ伝14章6節）

③「汝の聖言は我を活かししがゆえに、今もなおわが艱難のときの慰めなり」（50節）↓

「なんじら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり。」（ヨハネ伝16章33節）

④「汝の律法は、わが旅の家にてわが歌となれり。主よ、われ夜の間に汝の聖名をおもひ出して、汝の法を守れり」（54〜55節）↓

「わが戒命を保ちて之を守る者は、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし。」（ヨハネ伝14章21節）

⑤「困苦にあいたりしは我に善きことなり、これによりて我なんじの律法を学び得たり」（71節）↓

「汝らが遭いし試練は、人の常ならぬはなし。神は眞実なれば、汝らを耐え忍ぶこと能わぬほどの試練に遭わせ給わず。汝らが試練を耐え忍ぶことを得んために之と共に通るべき道を備え給わん。」（コリント前書10章13節）

⑥「汝の聖手は我を造り我を形づくれり、ねがわくは智慧を与えて我に汝の



戒命を学ばしめ給え。汝を畏るる者は我を見て喜ばん、われ聖言によりて望みを抱きたればなり」(73、74節) ↓

「エホバよなんじは我をさぐり我をしりたまえり² なんじはわが坐るをも立をもしり 又とほくよりわが念をわきまえたもう³ なんじはわが歩むをもわが臥をもさぐりいだしわがもろもろの途をことごとく知りたまえり⁴ そはわが舌に一言ありとも 観よ エホバよなんじことごとく知りたもう⁵ なんじは前より後よりわれをかこみわが上⁶にその手をおき給えり⁶ かかる知識はいとくすしくして我にすぐまた高くして及ぶことあたわず⁷ 我いずこにゆきてなんじの聖霊をはなれんや われいずこに往てなんじの前をのがれんや⁸ われ天にのぼるとも 汝かしこにいまし われわが榻を陰府にもうくるとも 観よなんじ彼処にいます⁹ 我あけぼのの翼をかりて海のはてにすむとも¹⁰ かしこにて尚なんじの手われをみちびき 汝のみぎの手われをたちたまわん¹¹ 暗はかならず我をおおい 我をかこめる光は夜とならんと我いうとも¹² 汝のみまえには暗ものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けりなんじにはくらきも光もことなることなし¹³ 汝はわがはらわたをつくり 又わがはの胎にわれを組成たまいたり¹⁴ われなんじに感謝す われは畏るべく奇しくつくられたりなんじの事跡はことごとくすし わが靈魂はいとつばらに之をしれり¹⁵ われ隠れたるところにてつくられ地の底所にて妙につづりあわされしときわが骨なんじにかくることなかりき¹⁶ わが体いまだ全からざるに なんじの目ははやくより之をみ 日々かたちづくられしわが百体の一だにあらざりし時に ことごとくなんじの冊にしるされたり¹⁷ 神よなんじのもろもろの思念はわれに宝きこといかばかりぞや そのみおの総計はいかに多きかな¹⁸ 我これを算えんとすれどもそのかずは沙よりもおおし われ眼さむるときも尚なんじとともにおる……²³ 神よねがわくは我をさぐりてわが心をしり 我をこころみてわがもろもろの思念をしりたまえ²⁴ ねがわくは我によこしまなる途のありやなしやを見てわれを永遠のみちに導きたまえ」(詩篇139篇1、18、23、24節)



見ずして信ずる者は恵福なり

2022年7月24日

へブル書11章1節には

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」

とあり、続いて、信仰によつて歩んだ昔の人たち（アベル、エノク、ノア、アブラハム、サラ、イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセ等々）のことが語られています。ヨハネ伝福音書では、20章19節以下において、復活された主イエスは、弟子たちに現われた時に居合わせなかったトマスが、「我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脇に差入るるにあらざれば信ぜじ」と言つて受け入れなかったのに対して、8日後に再び弟子たちに現われたイエスは、トマスに対して、

「汝の指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手を伸べて我が脇に差し入れよ、

信ぜぬ者とならで信ずる者となれ」

「汝、我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は恵福なり」

と論しておられます。日常生活の中で「見ずして信ずる」ことは、大変な冒険のように思われるかもしれませんが、しかし私達は、主キリスト（みたまの主様）が、常に最善を備え、最善を為してくださる事を確信しています。思い煩いの多かった私にとつて、「何事も思い煩うな（思い煩う必要は無いんだよ）、凡てを主キリストの御手に委ねるがよい」との福音書の御言葉が、どれほど心強かつたことか！ 私達の為すべきことは、

「まず、神の国と神の義とを求めよ、明日の事を思い煩うな」

との主キリストの御言葉に忠実であることです。「神の国と神の義」とは、私達にとつては、主キリストご自身の事です。だから、「何よりも、まず主キリストご自身を求めよ」と言うことです。そして、主キリストご自身と、主キリストの語られた御言葉とは、また一体です。すから、福音書における主キリストの御言葉を大切にすることです。例えば、「すべての戒めのうちで最も大切なものは何か」についての律法学者との問答の中で、

「第一は是なり、主なる我らの神は唯一の主なり。汝心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし。第二は是なり、おのれの如く汝の隣りを愛すべし、此の二つより大なる戒めはなし」

と答えておられます。この主キリストの言葉と、マタイ伝6章25〜34節の「まず神の国と神の義とを求めよ」との言葉とが、また、一体です。「見ずして信ずる」のお手本は、ラザロを蘇生させられたときの主イエスの御姿です。どのような願いでも、父なる神は聞き届けて成就してくださる事を、主イエスは信じ切っておられます（ヨハネ伝11章1〜44節）。へブル書11章1節の「望むところを確信し、見ぬ物を真実とする」姿（相）です。主イエスにおいては、父なる神への絶対的な信頼が主イエスの言行の原動力でしたが、私達においては、主キリストの約束の御言葉が祈り願う時の拠り所です。例えば、ヨハネ伝14章〜16章の御言葉です。



望むところを確信し、見ぬものを真実とする

2022年7月31日

今回は、前回に続いて「望み」に関する聖句を取り上げます。

①詩篇119篇73～74節

「汝を畏るる者は我を見て喜ばん、我聖言によりて望みを抱きたればなり。」

②詩篇119篇114節

「汝は我が隠るべき所我が盾なり、われ聖言によりて望みを抱く。」

③詩篇119篇147節

「われ朝まだき起き出でて呼ばわれり、われ聖言によりて望みを抱けり。」

④詩篇130篇5～7節

「我主を待ち望む、わが靈魂は待ち望む、我はその聖言によりて望みを抱く。
イスラエルよ、主によりて望みを抱け、」

⑤ヨハネ伝福音書15章7節

「汝等もし我に居り、わが言汝らに居らば、何にても望みに随いて求めよ、
さらば成らん。」

⑥ロマ書5章1～5節

「我ら、彼（主イエス・キリスト）により信仰によりて、今立つところの恩恵に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。然のみならず患難をも喜ぶ、それは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛われらの心に注げばなり。」

⑦ロマ書8章18～25節

「されどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは残れり。……（中略）……我らも自ら心のうちに嘆きて、己が体の贖われんことを待つなり。我らは望みによりて救われたり、目に見ゆる望みは望みに非ず、人その見るところをいかでなお望まんや。我らもし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。」

⑧ロマ書15章4節

「はやくより記されたる所は、聖書の忍耐と慰めとによりて希望を保たせんとてなり。」

13節

「願わくは希望の神、信仰より出づる凡ての喜悦と平安とを汝らに満たしめ、聖霊の能力によりて希望を豊かならしめ給わんことを。」

「望むところを確信し」とあるのは、我々が「自分勝手に望む」と言うことではなく、主キリストの「約束の御言葉」に基づいて「望む」ということを忘れてはならない。福音書における主キリストの言葉や、それを基にして語っているパウロ、ペテロ、ヨハネたち（使徒たち）の言葉に基づいて、「望み、祈り求める」ことが大切である。そして、「祈りたることは、既に叶えられたりとせよ」「見ずして信ずる者は幸いなり」との主キリストの約束の御言葉に励まされて歩む日々でありたい。



夏季特別集会（京都）に御参加の皆様へ

2022年8月7日

今回の特別集会は、1泊2日の短期間の集会ですが、それにもかかわらず十分な成果を達成するためには、参加者の各自において十分な準備をして頂くことが欠かせません。今回の特別集会の各回の講題主題は、以下の通りと致します。

第1回集会 8月27日（土）15：30～17：00

主題 「信・望一如」

第2回集会 8月27日（土）19：00～20：30

主題 「祈り」

第3回集会 8月28日（日）10：00～…30

主題 「愛（永遠の生命）」

そこで、御参加いただく皆様におかれましては、各回の主題にふさわしい聖句や聖書の箇所を選び出す作業をしておいて頂きたいと願っています。

例示に過ぎませんが、第1回の「信・望一如」に関しては、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」（ヘブル書11章

1節）

第2回の「祈り」に関しては、

「我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き歎きをもて

執り成し給う。」（ロマ書8章26節）

第3回の「愛（永遠の生命）」に関しては、

「それ神はその独り子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。」（ヨハネ伝3章16節）

以上のほかに、今回の主題とは直接に関係するわけではありませんが、この機会に、これまでの信仰生活において、「神（主キリスト）の護り、導き、励まし」となった聖句や聖書の箇所を書き出して見る作業をして頂くことが有益かと存じます。

奥田の場合は、

①マタイ伝6章25節～34節、

「²⁵この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著^きんと体^{からだ}のことを思い煩うな。生命は糧^{かて}にまさり、体は衣に勝るならずや。²⁶空の鳥を見よ、播^まかず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養^はいたもう。汝らは之よりも遙^{はるか}に優^{まさ}るる者ならずや。²⁷汝らの中たれか思い



煩いて身の長一尺を加え得んや。²⁸又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡がざるなり。²⁹されど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及^しかざりき。³⁰今日ありて明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。³¹さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。³²是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。³³まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。³⁴この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。」

②ヨハネ伝14章～16章、

「『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。²わが父の家には住^す処^{みか}おとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処を備えに往く。……』」

ヨハネ伝15章

「我は真の葡萄の樹^き、わが父は農夫なり。²おおよそ我にありて果^みを結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。……」

ヨハネ伝16章

「我これらの事を語りたるは、汝らの躓^{つまず}かざらん為なり。²人なんじらを除名^なすべし、然^{しか}のみならず、汝らを殺す者みな自ら神に事^{つか}うと思ふとき来^{きた}らん。……」

③コリント前書10章13節

「¹³汝らが遭いし試煉は人の常ならぬはなし。神は真実なれば、汝らを耐え忍ぶこと能わぬほどの試煉に遭わせ給わず。汝らが試煉を耐え忍ぶことを得んために之と共に遁^{のが}るべき道を備え給わん。」

のほか、数えきれないほどです。

御参加の皆様が、「祈りの火」を携えて御参集頂ける事を切望しています。



ヨハネ伝3章～6章：そのダイナミックな展開を追う

2022年9月18日

①ヨハネ伝3章…ニコデモとの対話

「人新たに生れずば……」

「新たに生れる」(新生)とは、「肉」なる存在を脱して「霊」なる存在へと転換すること(6章63節参照)。それを可能とするのは、十字架(「肉」の死、贖罪)を経ての「新生」(「霊」の次元の存在とされること)。ガラテヤ書2章20節参照。

「我キリストと偕ともに十字架につけられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信するに由りて生くるなり。」

②ヨハネ伝4章…サマリヤの女との対話

「神は霊なれば、拝する者も霊と真まこととをもて拝すべきなり。」(24節)

③ヨハネ伝5章…永遠の生命(24～29節)

「²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判さばきに至らず、死より生命に移れるなり。²⁵誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。²⁶これ父みずから生命を有もち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、²⁷また人の子たるに因りて、審判する権を与え給いしなり。²⁸汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。²⁹善をなしし者は生命に甦よみがえり、悪を行いし者は審判に甦よみがえるべし。」

④ヨハネ伝6章…永遠の生命の賦与(39～40節)、霊と肉…

「³⁹我を遣し給いし者の御意みこころは、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして、終の日に甦よみがええらする是なり。⁴⁰わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦よみがええらすべし」
「活かすものは霊なり、肉は益する所なし。わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」(63節)



天国人として生きる

2022年10月2日

聖句 ピリピ書3章20～21節

「されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの、救い主として、其の処より来たりたもうを待つ。彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき^{いや}状の体を化^かえて、己が栄光の体^{からだ}に象らせ給わん。」

関連の聖句

1 ピリピ書1章20～21節

「我が何事をも恥じずして、今も常のごとく聊^{ちやう}かも臆することなく、生くるにも死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給わんことを切に願ひ、また望むところに適^{かな}えるなり。我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」

ピリピ書1章27～29節

「汝等ただキリストの福音に相応^{ふさわ}しく日を過ごせ。さらば（中略）汝らが霊を一つにして硬く^{かた}立ち、心を一つにし福音の信仰のために共に戦ひ、凡ての事において逆う者に驚かされぬを知ることを得ん。（中略）汝等はキリストのために、ただに彼を信ずる事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜^{たま}わりたればなり。」

ピリピ書2章13～15節

「神は御意^{みこころ}を成さんために汝らの内に働き、汝等をして志望^{しやうぼう}をたて、業^{わざ}を行わしめ給えばなり。汝等、眩^{くら}かず疑わずして、凡ての事を行なえ。（中略）汝らは生命^{いのち}の言^{ことば}を保ちて、世の光のごとくこの時代に輝く。」

ピリピ書4章4～8節

「⁴汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。⁵凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ、主は近し。⁶何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈をなし、願^{ねが}をなし、感謝して汝らの求^{もと}を神に告げよ。⁷さらば凡て人の思^{おも}ひにすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。⁸終に言わん、兄弟よ、凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞^{れいぶん}あること、如何なる徳いかなる誉^{ほまれ}にても、汝等これを念^{おも}え。」

2 コロサイ書3章1～4節、9～17節



3

「¹汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。²汝ら上にあるものを念い、地に在るものを念うな、³汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」

「⁹互に虚言をいうな、汝らは既に旧き人とその行為とを脱ぎて、¹⁰新しき人を著たればなり。この新しき人は、これを造り給いしものの像に循い、いよいよ新になりて知識に至るなり。¹¹かくてギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、あるいは夷狄、スクテヤ人・奴隸・自主の別ある事なし、それキリストは万の物なり、万のもののの中にあり。¹²この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ。¹³また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらば互に恕せ、主の汝らを恕し給える如く汝らも然すべし。¹⁴凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。¹⁵キリストの平和をして汝らの心を掌とらしめよ、汝らの召されて一体となりたるはこれが為なり、汝ら感謝の心を懷け。¹⁶キリストの言をして豊に汝らの衷に住ましめ、凡ての知恵によりて、詩と讚美と霊の歌とをもて、互に教え互に訓戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讚美せよ。¹⁷また為す所の凡ての事、あるいは言あるいは行為、みな主イエスの名に頼りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。」

マタイ伝6章19～34節

「¹⁹なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人うがちて盗むなり。²⁰なんじら己がために財宝を天に積み、かしこは虫と錆とが損わず、盗人うがちて盗まぬなり。²¹なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。²²身の灯火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。²³されど汝の目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いばかりぞや。²⁴人は一人の主に兼ね事うること能わず、或はこれを憎み彼を愛し、或はこれに親しみ彼を軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事うること能わず。²⁵この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。²⁶空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優るる者ならずや。²⁷汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。²⁸又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡がざるなり。²⁹されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その



4

服装^{よそおい}この花の一つにも及^しかざりき。³⁰今日ありて明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。³¹さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。³²是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。³³まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。³⁴この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。」

マタイ伝11章25〜30節

5

「²⁵その時イエス答えて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを^{かし}智き者^{さとし}慧き者^{みどり}にかくして、嬰兒に顯し給えり。²⁶父よ、然り、かくの如きは御意に適えるなり。²⁷すべての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子または子の欲するままに顯すところの者の外^{ほか}になし。²⁸凡て勞する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません。²⁹我は柔和にして心卑ければ、我が軛^{くびき}を負いて我に学べ、さらば靈魂に休息^{やすみ}を得ん。³⁰わが軛は易^{やす}く、わが荷は輕ければなり』」

コリント後書4章7〜18節

6

「⁷我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力^{ちから}の我等より出でずして、神より出づることの顯^みれんためなり。⁸われら四方より患難^{なやみ}を受くれども窮^{きゆう}せず、為^せん方つくれども希望^{のぞみ}を失わず、⁹責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、¹⁰常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。¹¹それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付^つさるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。¹²さらば死は我等のうちに働^{はたら}き、生命は汝等のうちに働くなり。¹³録^{しる}して『われ信ずるによりて語れり』とあるごとく、我等にも同じ信仰の靈あり、信ずるに因りて語るなり。¹⁴これ主イエスを甦^{よみが}えらせ給いし者の我等をもイエスと共に甦^{よみが}えらせ、汝らと共に立たしめ給うことを我ら知ればなり。¹⁵凡ての事は汝らの益なり。これ多くの人によりて御恵^{みめぐみ}の増し加わり、感謝いや増^まりて神の栄光の顯^みれん為なり。¹⁶この故に我らは落肝^{きおち}せず、我らが外なる人は壞^{やぶ}るれども、内なる人は日々に新なり。¹⁷それ我らが受くる暫^{しば}くの輕き患難は、極めて大なる永遠の重き光榮を得しむるなり。¹⁸我らの顧みる所は見ゆるものにあらず見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時^{しばらく}にして、見えぬものは永遠^{とこしえ}に至るなり。」

コリント後書5章14〜19節

「¹⁴キリストの愛われらに迫れり。我ら思うに、一人すべての人に代りて死にたれば、凡ての人すでに死にたるなり。¹⁵その凡ての人に代りて死に給いしは、



生ける人の最早おのれの為に生きず、己に代り死にて甦えり給いし者のために、生きん為なり。¹⁶されば今より後われ肉によりて人を知るまじ、曾て肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯くの如くに知ることをせじ。¹⁷人もしキリストに在らば新に造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり。¹⁸これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己と和がしめ、かつ和がしむる職を我らに授け給えり。¹⁹即ち神はキリストに在りて世を己と和がしめ、その罪を之に負わせず、かつ和がしむる言を我らに委ね給えり。」

7 コリント後書6章16～18節

「¹⁶神の宮と偶像と何の一致かあらん、我らは活ける神の宮なり、即ち神の言い給いしが如し。曰く『われ彼らの中に住み、また歩まん。我かれらの神となり、彼等わが民とならん』と。¹⁷この故に『主いい給う、「汝等かれらの中より出で、之を離れ、穢れたる者に触るなかれ」と。』さらば我なんじらを受け、¹⁸われ汝らの父となり、汝等わが息子むすめとならん」と、全能の主いい給う』とあるなり。」

8 コリント後書12章7～10節

「⁷我は我が蒙りたる黙示の鴻大なるによりて高ぶることのなからん為に、肉体に一つの刺を与えらる、即ち高ぶることなからん為に我を撃つサタンの使なり。⁸われ之がために三度まで之を去らしめ給わんことを主に求めたるに、⁹言いたもう『わが恩恵なんじに足れり、わが能力は弱きうちに全うせらるればなり』さればキリストの能力の我を庇わんために、寧ろ大に喜びて我が微弱を誇らん。¹⁰この故に我はキリストの為に微弱・恥辱・艱難・迫害・苦難に遭うことを喜ぶ、そは我よわき時に強ければなり。」

9 コリント後書13章3節後半～4節、同8節

「³汝らはキリストの我にありて語りたもう証拠を求むればなり。キリストは汝らに対して弱からず、汝等のうちに強し。⁴微弱によりて十字架に釘けられ給いたれど、神の能力によりて生き給えばなり。我らもキリストに在りて弱き者なれど、汝らに向う神の能力によりて彼と共に生きん。」
「⁸我らは真理に逆いて能力なく、真理のためには能力あり。」



3

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。² 汝ら上にあるものを念い、地に在るものを念うな、³ 汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。⁴ 我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」

「⁹ 互に虚言をいうな、汝らは既に旧き人とその行為とを脱ぎて、¹⁰ 新しき人を著たればなり。この新しき人は、これを造り給いしものの像に循い、いよいよ新になりて知識に至るなり。¹¹ かくてギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、あるいは夷狄、スクテヤ人・奴隸・自主の別ある事なし、それキリストは万の物なり、万のものの中にあり。¹² この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ。¹³ また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらば互に恕せ、主の汝らを恕し給える如く汝らも然すべし。¹⁴ 凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。¹⁵ キリストの平和をして汝らの心を掌どらしめよ、汝らの召されて一体となりたるはこれが為なり、汝ら感謝の心を懷け。¹⁶ キリストの言をして豊に汝らの衷に住ましめ、凡ての知恵によりて、詩と讚美と霊の歌とをもて、互に教え互に訓戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讚美せよ。¹⁷ また為す所の凡ての事、あるいは言あるいは行為、みな主イエスの名に頼りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。」

マタイ伝6章19～34節

「¹⁹ なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人うがちて盗むなり。²⁰ なんじら己がために財宝を天に積み、かしこは虫と錆とが損わず、盗人うがちて盗まぬなり。²¹ なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。²² 身の灯火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。²³ されど汝の目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかりぞや。²⁴ 人は二人の主に兼ね事うることを能わず、或はこれを憎み彼を愛し、或はこれに親しみ彼を軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事うることを能わず。²⁵ この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。²⁶ 空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙



に優る者ならずや。²⁷ 汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。²⁸ 又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、²⁹ 勞せず、紡がざるなり。³⁰ されど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。³¹ 今日ありて明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。³² さらば何を食ひ、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。³³ 是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。³⁴ まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。³⁵ この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。」

4

マタイ伝11章25～30節

「²⁵ その時イエス答えて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者慧き者にかくして、嬰兒に顯し給えり。²⁶ 父よ、然り、かくの如きは御意に適えるなり。²⁷ すべての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子または子の欲するままに顯すところの者の外になし。²⁸ 凡て勞する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません。²⁹ 我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負いて我に学べ、さらば靈魂に休息を得ん。³⁰ わが軛は易く、わが荷は輕ければなり』」

5

コリント後書4章7～18節

「⁷ 我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顯れんためなり。⁸ われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、⁹ 責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、¹⁰ 常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。¹¹ それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付さるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。¹² さらば死は我等のうちに働き、生命は汝等のうちに働くなり。¹³ 録して『われ信ずるによりて語れり』とあるごとく、我等にも同じ信仰の靈あり、信ずるに因りて語るなり。¹⁴ これ主イエスを甦えらせ給ひし者の我等をもイエスと共に甦えらせ、汝らと共に立たしめ給うことを我ら知ればなり。¹⁵ 凡ての事は汝らの益なり。これ多くの人によりて御恵の増し加わり、感謝いや増りて神の榮光の顯れん為なり。¹⁶ この故に我らは落肝せず、我らが外なる人は壞るれども、内なる人は日々に新なり。¹⁷ それ我らが受くる暫くの輕き患難は、極めて大なる永遠の重き光榮を得しむるなり。¹⁸ 我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは



永遠に至るなり。」

6

コリント後書5章14～19節

「¹⁴キリストの愛われらに迫れり。我ら思うに、一人すべての人に代りて死にたれば、凡ての人すでに死にたるなり。¹⁵その凡ての人に代りて死に給いしは、生ける人の最早おのれの為に生きず、己に代り死にて甦えり給いし者のために、生きん為なり。¹⁶されば今より後われ肉によりて人を知るまじ、曾て肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯くの如くに知ることをせじ。¹⁷人もしキリストに在らば新に造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり。¹⁸これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己と和がしめ、かつ和がしむる職を我らに授け給えり。¹⁹即ち神はキリストに在りて世を己と和がしめ、その罪を之に負わせず、かつ和がしむる言を我らに委ね給えり。」

7

コリント後書6章16～18節

「¹⁶神の宮と偶像と何の一致あらん、我らは活ける神の宮なり、即ち神の言い給いしが如し。曰く『われ彼らの中に住み、また歩まん。我かれらの神となり、彼等わが民とならん』と。¹⁷この故に『主いい給う、「汝等かれらの中より出で、之を離れ、穢れたる者に触るなかれ」と。』さらば我なんじらを受け、¹⁸われ汝らの父となり、汝等わが息子むすめとならん」と、全能の主いい給う』とあるなり。」

8

コリント後書12章7～10節

「⁷我は我が蒙りたる黙示の鴻大なるによりて高ぶることのなからん為に、肉体に一つの刺を与えらる、即ち高ぶることなからん為に我を撃つサタンの使なり。⁸われ之がために三度まで之を去らしめ給わんことを主に求めたるに、⁹言いたもう『わが恩恵なんじに足れり、わが能力は弱きうちに全うせらるればなり』さればキリストの能力の我を庇わんために、寧ろ大に喜びて我が微弱を誇らん。¹⁰この故に我はキリストの為に微弱・恥辱・艱難・迫害・苦難に遭うことを喜ぶ、そは我よわき時に強ければなり。」

9

コリント後書13章3節後半～4節、同8節

「³汝らはキリストの我にありて語りたもう証拠を求むればなり。キリストは汝らに對いて弱からず、汝等のうちに強し。⁴微弱によりて十字架に釘けられ給いたれど、神の能力によりて生き給えばなり。我らもキリストに在りて弱き者なれど、汝らに向う神の能力によりて彼と共に生きん。」

「⁸我らは真理に逆いて能力なく、真理のためには能力あり。」



わが「生」(生命、生活、人生)の原点

2022年10月16日

(要旨)

「神はその独り子(御子キリスト)を我に賜ったほどに我を愛してくださいました。それは、御子を信受・体受することにより、御子と一如・一体とされ、永遠の生命者とされるためであった。」(ヨハネ伝3章16節)

「神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子ひとりごを世に遣しつかわ、我等をして彼によりて生命を得しめ給うによる。愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥めなだの供物もつものとなし給ひし是なり。」(ヨハネ第一書4章9～10節)

顧みれば、神・キリストを知る(神・キリストの側から、ご自身を啓示してくださいさる)までは、自分の人生においては、自分が自分の主人公であるが故に、すべてが「自己責任」であり、その重圧に私は押しつぶされていた。責任を果たし得ぬ自分に苦しみ、将来に対する不安で暗黒の日々であった。必然的に体の健康をも損ねていた。そのような状況下で接したキリストの福音の呼びかけは、

「すべて労する者、重荷を負う者、我に來たれ。我、汝を休ません。」

「何事をも思い煩うな、まず、神の国と神の義とを求めよ、そうすれば、凡て必要なものは、添えて与えられん。明日あすの事を思い煩うな。明日は、明日自らが思い煩わん、一日の苦労は一日にて足れり。」

との、まことに恵み深い呼びかけであった。この呼びかけの御声に身を委ねたとき、はじめて、心に平安をいただいた。自分が自分の「生」(生命、生活、人生)の主人であることを止め、凡てを主キリストの御手にお返しし、その導きのままに生きる。有難いことに、福音書や使徒書簡に「恵みの言葉」が溢れている。まさに、

「人が生きるのは、パンだけによるのではなく、神の御口から出る一つ一つの言葉による」

のであり、

「生かすものは霊なり、肉は役立たず、わが語りし言葉は、霊なり、命なり。

神は霊なれば、拝する者も霊と真実まこととをもて拝すべきなり。」

の御言葉の通りであった。

ここで、正直に告白しておかねばならないことがある。キリストの福音に接していただいた「平安な生活」は長くは続かなかった。次第に、自分の罪深さに悩むこととなった。



それまでは、気にも留めなかったいろいろなことが、義なる神の前には許されないこと(罪であること)に悩むこととなった。いつしか、心の平安は消え失せ、身体健康さえも危ぶまれるように思えた。そこからの脱却は、

「自分の全存在を主キリストに委ねきること」

自分が神・キリストの前に正しいか、正しくないか、そのような詮索をすべて放棄して、主キリストの十字架上での贖罪において、わが全存在が贖われてあること、

「我、主イエスとともに十字架に付けられたり。もはや、(旧き)我生くるにあらず、御霊の主キリスト、新しき我のうちにありて生きたもうなり。」

を信受・体受して祈り心で真つすぐに歩む事のほかにはない。

コロサイ書3章1～4節、9～17節。

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。²汝ら上にあるものを念い、地に在るものを念うな、³汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」

「⁹互に虚言をいうな、汝らは既に旧き人とその行為とを脱ぎて、¹⁰新しき人を著たればなり。この新しき人は、これを造り給いしものの像に循い、いよいよ新になりて知識に至るなり。¹¹かくてギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼あるいは夷狄、スクテヤ人・奴隸・自主の別ある事なし、それキリストは万の物なり、万のものの中にあり。¹²この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ。¹³また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらば互に恕せ、主の汝らを恕し給える如く汝らも然すべし。¹⁴凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。¹⁵キリストの平和をして汝らの心を掌とらしめよ、汝らの召されて一体となりたるはこれが為なり、汝ら感謝の心を懷け。¹⁶キリストの言をして豊に汝らの衷に住ましめ、凡ての知恵によりて、詩と讚美と霊の歌とをもて、互に教え互に訓戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讚美せよ。¹⁷また為す所の凡ての事、あるいは言あるいは行為、みな主イエスの名に頼りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。」



新約聖書は神（キリスト）からのラブレター、旧約はその予告編

2022年10月23日

新約聖書を読むとき、そこに記述された内容が、現在では、既に「成りたる事態（事実）」として受け取るべき場合が多いことに注意が必要である。例えば、

ヨハネ伝7章37～39節

『人もし渴かば我に來りて飲め。我を信する者は、聖書に云へることく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』これは彼を信する者の受けんとする御霊を指して言ひ給ひしなり。イエス未だ栄光を受け給はざれば、御霊いまだ降らざりしなり。』

とあるが、後代（現代）の我々にとつては、主イエスが十字架で「贖罪」の大業を果たし終え、栄光の姿で現れてくださった（復活と呼ばれている事態）現在では、主キリストを信受・体受する我々においては、我々自身が

「聖霊の証人とせられ、我々自身から命の真清水が流れ出す存在」

として用いられることに留意すべきである。

同様に、ルカ伝12章49～50節

「我は火を投ぜんとて來れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を渴望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、思ひ^{せま}逼ること如何ばかりぞや。」

は、

「主様、あなたが十字架で血のバプテスマ（贖罪の大業）をお受けくださった（果たしてくださった）以上は、もはや、何の妨げもありません。どうぞ、聖霊の火となつて降ってください。そして、あなたの証し人としてお用いください！」

との祈りとなる。

このように、新約聖書の記事（記述）は、

「神・キリストから我々への呼びかけ」（ラブレター）

として読むべき場合が多い。我々は、その呼びかけに対して、全存在をもつてお応えすべきである。その「お応え」は、しばしば、「祈り」となる。即ち、「祈り」とは、我々の側の「願望」を述べるよりも前に、神（主キリスト）からの呼びかけに応えることが、第一である。このような視点から主キリストの言葉を読むならば、なんと慰め深い言葉が多いことだろうか！ 例えば、

「凡て勞する者・重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和



にして心卑ひくければ、我が軛くびきを負ひて我に学べ、さらば靈魂たましひに休息やすみを得ん。わが軛は易く、わが荷は軽ければなり。」

によつて、私自身がどれほど「慰めと安らぎ」を頂いたことだろうか！

上に、「旧約はその予告編」と記したが、例えば、詩篇103篇3〜5節

「主は汝がすべての不義をゆるし、汝のすべての病を癒し、汝の生命を滅びより贖い出し、仁慈いつしみと憐憫あわれみとを汝に被こむらせ、汝の口を佳よき物にて飽かしめ給ふ、かくて汝は若やぎて驚のごとく新たになるなり。」

や、イザヤ書40章28〜31節、

「²⁸汝しらざるか聞かざるかエホバはとしへの神地ののはての創造者にして倦うみたまふことなくまた疲れたまふことなくその聰明さとさこと測りがたし²⁹疲れたるものには力をあたへ勢力いきおいなきものには強きをまし加へたまふ³⁰年少わかきものもつかれてうみ壯さかなるものも衰へおとろふ³¹然はあれどエホバを俟望まちのぞむものは新なる力をえんまた驚のごとく翼をはりてのぼらん走れどもつかれず歩めども倦まざるべし」

同55章6〜13節、

「⁶なんぢら遇うことをうる間にエホバを尋ねよ近くゐたまふ間によびもとめよ⁷悪きものはその途をすてよこしまなる人はその思念おもひをすててエホバに反かえれさらば憐憫あわれみをほどこしたまはん我等の神にかへれ豊に赦ゆるしをあたへ給はん⁸エホバ宣のたま給くわが思はなんぢらの思となりわが道はなんぢらのみちと異なれり⁹天の地よりたかきごとくわが道はなんぢらの道よりも高くわが思はなんぢらの思よりもたかし¹⁰天より雨くだり雪おちて復かへらず地をうるほして物をはえしめ萌めをいださしめて播まくものに種をあたへ食ふものに糧をあたふ¹¹如此かくわが口よりいづる言もむなしくは我にかへらずわが喜ぶところを成しわが命じ遣りし事をはたさん¹²なんぢらは喜びて出きたり平穩おだやかにみちびかれゆくべし山と岡とは聲をはなちて前にうたひ野にある樹はみな手をうたふ¹³松樹まつぎはいばらにかはりてはえ岡拈樹もちのきは棘にかはりてはゆべし此はエホバの頌美ほまれとなり並またとこしへの徴しるしとなりて絶ゆることなからん」

を、その角度から受け取りたい。



神讚美の人生を！

2022年10月30日

「天地万物の創造主」としての「神」の存在や、その「神」と我々とは如何なる関わりがあるかなどは、我々の側で考えてもわかるものではない。我々の側で認識・体験することのできない「神」を表してくださったのが、イエス・キリストであり、その御生涯（御言葉と御業）をもって、「神」の存在と、その内実（我々との関わり）を表してくださった。ヨハネ福音書14章においてピリポが、「父なる神」を示して欲しいと願い出たのに対して、

「私を見た者は父なる神を見たのだ。私があなた方に語った言葉は、父なる神が私の中で為したもうた御業である」

と答えておられる。このように、イエス・キリストの全生涯が「神」を表しておられるのである。山上で祈っておられると、まばゆい姿に輝き、そのまま天界に昇るにふさわしい方が、十字架に架けられて我々の罪（つみとが）を贖ってくださった、この「捨て身の御愛」に触れて、初めて、我々は「神の御愛」を体感することが出来た。その消息を、詩篇103篇の「ダビデのうた」が代弁してくれている。曰く、

「わが靈魂よ主を讃めまつれ。わが衷なる凡てのものよ、その聖き御名をほめまつれ。その凡ての恩恵を忘るるなかれ。主は汝が凡ての不義を許し、汝のすべての疾を癒し、汝の生命を滅亡より贖ひいだし、仁慈と憐憫とを汝に冠らせ、汝の口を嘉き物にて飽かしめ給ふ、かくて汝は壮やぎて驚のごとく新たになるなり」

と。また、イザヤ書40章27～31節において、

「主はとこしえの神、地の果ての創造者であつて、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵は測りがたい。弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れ果てて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、鷺のように翼を張つて、のぼることができる。走つても疲れることなく、歩いても弱ることはない」

との励ましの御言葉が続く。主キリストは、弟子たちとの別れを前にして、

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また、我を信ぜよ。我、汝らのために処を備へに往く。我が居るところに汝らも居らん為なり。汝ら我を選びしにあらず、我、汝らを選び。汝らの往きて実を結び、且つその実の残らんために、また、おほよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜はんために汝らを立てたり。汝ら世に在りては患難あり。されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」（ヨハネ福音書14章～16章の抜粋）

との御言葉をもって、励まし続けてくださっている。詩篇33篇1節には、「讚美は直き者にふさわしい」と謳われている。主の十字架の贖罪によつて「直き者」とされた我々にふさわしいのは、世界が、世の中が、また我々自身の状況が、いかなるものであろうとも、「神讚美、キリスト讚美」の心と生き方を貫くことである。讚美歌136番「血潮したたる主の、みかしら」、138番「ああ主は誰がため世に下りて」に対して、285番「主よ、み手もて」をもつて、お応えするのみである。



主が家を建てられるのであれば

2022年11月6日

詩篇第127篇1～2節（ソロモンの都もうでの歌）

「主が家を建てられるのであれば、建てる者の勤労はむなしい。主が町を守られるのであれば、守る者の覚めているのはむなしい。あなたがたが早く起き、遅く休み、辛苦の糧を食べることは、むなしいことである。主はその愛する者に、眠っている時にも、無くてならぬものを与えられるからである。」

私（奥田）は、このソロモンの言葉に感動致します。主キリストに出会っていただくまでの私は、自分が「自分の人生」という建築物の施主であり、自分の力と努力で建物を作って上げ、壊れないように維持してゆくという労苦と責任の重さに、押しつぶされそうになっていた。「生きる喜び」などからは、ほど遠かった。主キリストへと導かれ、この方こそが「私という存在、私の人生」という建築物の、真の設計者であり、全責任をもつて護り、導き給うお方であることを知り、その御配慮と導きに「全托」するようになって、初めて、真の平安を味わうようになった。福音書のキリストの言葉は、なんと力強く、慰め深いことだろうか！

「何事も思い煩うな、まず、神の国とその義とを求めよ（「神の国と神の義」の本体は、主キリストご自身）。必要なものは、すべて、添えて与えられる。一日の苦労は、その日、一日で十分である。」

「我なり、懼るな、心やすかれ。」

など、など。上記の文章の初めに「詩篇」から引用したが、詩篇には主への信頼の呼びかけや感謝があふれている。その幾つかを挙げてみよう。

①「もしも主がわたしを助けられなかったならば、わが魂は、とくに音なき所に住んだであろう。しかし「わたしの足がすべる」と思ったとき、主よ、あなたの慈しみは、わたしを支えられました。わたしのうちに思い煩いの満ちるとき、あなたの慰めは、わが魂を喜ばせます」（94篇17～19節）。

②「神よ、わたしを憐れんでください。わたしの魂は、あなたに寄り頼みます。滅びの嵐の過ぎ去るまでは、あなたの翼の陰をわたしの避け所とします。わたしは、いと高き神に呼びわります。わたしのために凡ての事を成し遂げられる神に呼びわります。（中略）神よ、わたしの心は定まりました。わたしは歌い、かつ褒めたたえます。（中略）あなたの慈しみは大きく、天にまで及び、あなたの誠は雲にまで及びます。神よ、みずからを天よりも高くし、み栄を全地の上に挙げてください」（57篇抜粋）。

③139篇より。「主よ、あなたは私を探り、私を知り尽くされました。あなたはわが座るをも、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。あなたは後ろから、前から私を囲み、私の上に御手を置かれます。私はどこへ行つて、あなたのみたまを離れましょうか。あなたは、わが内臓を作り、わが母の胎内で私を組み立てられました。あなたの御業はくすしく、あなたは最もよく私を知っておられます。わがよわいの日のまだ一日も無かったとき、その日はことごとく、あなたの書に記された。あなたのもろもろの御思いは、なんと尊いことでしょう。私が目覚めるとき、あなたと共にいます。」（以下、略）



「永遠の生命」に生きる——主の僕^{しもべ}の道——

2022年11月13日

前回(11月6日)の「講筵要旨」において書いたように、主キリストに出会っていただくまでは、自分が「自分の人生」の主人であり、自分の意志と責任において凡てのことを決めてゆく「独立人」(自分という独立国の君主)であった。この世の多くの人は今もそのような生き方を当然のこととして「独立歩の歩み」を継続している。ところが、不甲斐ない自分(奥田)は、そのような独立人であることが出来ずに、主キリストという「君主」の軍門に降伏し、自己という「城」を明け渡すこととなった。世間の独立人からすれば、まことに「不甲斐ない」次第である。主キリストという主君に仕える身となった以上は、主君の意志と命令が「全て」であって、それを離れて「自己の独自の意志や生き方」は、もはや、あり得ない。ところが、これが私にとつては、まことに有難い「恵み」であった。第一に、この主君は、僕のために、僕の罪・咎^{とが}の凡てを背負って十字架にて「贖罪」を果たしてくださったのである。それどころか、ご自身のご復活の命(永遠の生命)を僕に無条件に賜るというのである。こんなことは、この世では、絶対にあり得ないことである。その消息をパウロはロマ書第5章から第6章において書いてくれている。

主君のキリストは、僕に対して、

「生きよ、永遠の生命に生きよ!」

と命じておられる。主イエスは、

「我は復活^{よみがえり}なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を

信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか」(ヨハネ伝11章25節)

と我々に対して問いかけておられる。もちろん、「はい、全存在で信受いたします」とお答えするのみである。そして主は、この命令とともに、それを実現するのに必要な一切のものを与えてくださるのである。パウロの

「我、主と共に十字架に付けられたり。もはや、我(旧き我) 生くるにあらず、

み霊のキリスト、我が内にありて生くるなり」(ガラテヤ書2章20節)

との告白を、我が告白として、お応えするのみである。さらに、み霊のキリストは、必要な一切のものを備え、与えてくださる。マタイ伝6章25〜34節の約束の御言葉を成就してくださっているのである。主キリストは、

「神は霊なれば、拝する者も霊と眞^{まこと}とをもて拝すべきなり。」

と語られ、

「活かすものは霊なり、我が汝らに語りし言は、霊なり、生命なり」(ヨハネ伝

6章63節)

と語られ、現世(現象界)を超えた「天上界」に生きると論しておられる。ピリピ書やコロサイ書は、そのことを強く迫る書簡であるし、コリント後書4章7節以下は、我らの

「外なる人は壊^{やぶ}れるれども、内なる人は日々に新たなり」

と現世を超えた「永遠界」に目を向けるようにと勧めている。わたしたちは、これらの恵みの言葉に、全存在をもって、応答したいと願う。



詩篇の「祈り」の更なる展開を！

2022年11月20日

詩篇は単なる「美しき詩」ではない。そこに込められた魂の叫び、祈りを確と受け止めて、その成就・展開を実現してゆかねばならない。主イエスは詩篇を愛読された。また、「第二イザヤ」と呼ばれているイザヤ書第40章以下の予言を成就された。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマ（十字架上での贖罪死のこと）あり。その成し遂げらるるまでは、思ひ逼ること如何ばかりぞや。」（ルカ伝12章49、50節）

との呻きを吐露しておられる。主は詩篇の「祈り・願い・呻き」を全存在をもつて受け取り、それに応えられた。我々は、詩篇の「呻き・叫び・祈り」と主イエスの伝道と犠牲（十字架）、それに続く勝利（復活・昇天・聖霊の降臨）を体受し、日々の生活と集会での讃美と祈りにおいて実証してゆく責任がある。その角度から、今後折々、詩篇を取り上げることとする。

①第84篇（抜粋）

「万軍の主（「エホバ」を「主」と読み替える）よ、わが魂は絶え入るばかりに主の大庭を慕い、わが心わが身は活ける神にむかいて呼ばう。汝の家に住む者は恵福なり。かかる人は常に汝を讃えまつらん。その力、汝に在り、その心、シオンの大路に在る者は恵福なり。彼らは涙の谷を過ぐれども、そこを多くの泉ある処となす。彼らは力より力にすすみ、遂に各々シオンに到りて神にまみゆ。万軍の神・主よ、我が祈りを聴きたまえ。汝の大庭に住まう一日は千日にもまされり。我は悪の幕屋に居らんよりは、むしろ、我が神の家の門守りとならんことを願うなり。そは、神・主は日なり、盾なり、主は恩と栄光とを与え、直く歩む者に嘉き物を拒み給うことなし。万軍の主よ、汝に依り頼む者は恵福なり。」

②第86篇（抜粋）

「主よ、汝、耳を傾けて我に応えたまえ、我は苦しみ、且つ乏しければなり。願わくは、わが靈魂を守り給え、我、神を敬う者なればなり。主よ、汝の道を我に教えたまえ、我、汝の真理を歩まん。願わくは我をして心ひとつに聖名を畏れしめたまえ。汝の憐憫は我に大いなり、我が靈魂を陰府の深き処より助け出したまえり。」

③第91篇（抜粋）

「至高者（いと高き者）の下なる隠れたる所に住まうその人は、全能者の陰に宿らん。汝、至高者をその住居となしたれば、災害汝に到らず、苦難汝の幕屋に近づかじ。そは、至高者、汝のために、その使者たちに命じて汝が歩むもろもろの道に汝を守らせ給えばなり。……彼（汝）その愛を我（至高者）に注げるが故に我これを助けん。彼、我が名を知るが故に、我これを高き処に置かん。彼、我を呼ばば我応えん、我その苦難のときに共に居りて、之を助け之を崇めん。我、長寿をもて彼を足らわしめ、且つ我が救いを示さん。」



どん底で担い給う主キリスト

2022年11月27日

イザヤ書57章15節、

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖と唱えられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊を活かし、砕けたる者の心を活かす。』」

『わたしは彼の道を見た。わたしは彼を癒し、また彼を導き、慰めをもつて彼に報い、悲しめる者のために、くちびるの実を造ろう。遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ。わたしは彼を癒そう』と主は言われる。』(同18～19節)

「わたしは主がわれわれに為された凡てのことによって、主の慈しみと、主の誉れとを語り告げ、また、その憐みにより、その多くの慈しみによって、イスラエルの家に施されたその大いなる恵みを語り告げよう。主は言われた、『まことに彼らは我が民、偽りのない子らである』と。そして主は彼らの救い主となられた。彼らの凡ての悩みのとき、主も悩まれて、そのみ前の使いをもつて彼らを救い、その愛と憐みとによって彼らを贖い、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた。』(同63章7～9節)

上記の57章15節は主キリストのお姿を表しているし、18～19節の「彼」は私たちであり、63章7～9節の「わたし」は主キリストにより贖われ、救われた私たちである。このイザヤ書の預言に照応するような箇所がマタイ伝11章25節以下である。その中で主キリストは、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしの軛くみきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

と、私たちを招いてくださっている。自らには何の原因(罪・咎)も理由もなく、背負いきれない重荷(我々の罪・咎)を負って十字架上で砕かれたもうた主イエス・キリスト。わたしたちは、いかなる不条理な運命や逆境に見舞われようと、失望・落胆することはない。み霊の主キリストがいつも共にいてくださるからだ。

「あなたがたを捨てて孤児とはしない。わたしが生きるの、あなたがたも生きるからである」(ヨハネ伝14章18～21節の要点)

「あなたがたはこの世では、悩みがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

との励ましの言葉は、今も不滅である。パウロは

「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはいばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、逃れる道も備えてくださるのである。」

と励ましてくれている。冒頭のイザヤ書57章15節に照応するのは、

「恵福さいわいなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり。」(マタイ伝5章3節)

との主キリストの言葉である。わたしたちは、いかなる時にも、主キリストと「共なる日々」を過ごしたいと願う。



望みて喜び、患難に耐え（ロマ書12章12節）

2022年12月4日

ロマ書12章では、集会の在り方、集会における各人の役割などについて語られています。

「人は一つ体からだに多くの肢えだあれども、凡ての肢その運用はたらきを同じうせぬ如く、我等も多くあれど、キリストに在りて一つ体にして、各人互いに肢おののたるなり。われらが持てる賜物たまものは、各々与えられし恩恵めぐみによりて異なる故に、或は預言あらば信仰の量はかりにしたがひて預言をなし、或は務めあらば務めをなし、或は教えをなす者は教えをなし、或は勧めをなす者は勧めをなし、施す者は惜しみなく施し、治むる者は心を尽くして治め、憐憫あわれみをなす者は喜びて憐憫をなすべし。愛には虚偽いつわりあらざれ、悪は憎み、善は親しみ、兄弟の愛をもて互いに愛しみ、礼儀をもて相譲り、勤めて怠らず、心を熱くし、主に仕え、望みて喜び、患難なやみに耐え、祈りを恒つねにし、聖徒の欠乏とほしきを賑にぎわし、旅人を懇ろねんじにもてなせ。汝らを責むる者を祝し、これを祝して呪うな。喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣け。相互あいたがいに心を同じうし、高ぶりたる思いをなさず、反ひくつて卑きに付け。汝ら、己を聡さとしとすな。悪をもて悪に報いず、凡ての人の前に善からんことを図はかり、汝らの為し得る限り、努めて凡ての人と相和あはげ。愛する者よ、自ら復讐はくしすな、ただ神の怒りに任せまつれ。録しるして『主いひ給ふ、復讐するは我にあり、我これを報いん』とあり。『もし汝の仇飢えなば之に食わせ、渴かば之に飲ませよ、汝斯くするは熱き火を彼の頭に積こむなり』悪に勝たるることなく、善をもて悪に勝て。』（12・4～21）

コリント前書12章でも、霊の賜物について語られています。即ち、

「賜物こもつは殊ことなれども、御霊は同じ。務めは殊なれども、主は同じ。活動はたらきは殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動を為したまふ神は同じ。御霊の顕現あらわしを各々に賜ひたるは、益を得させんためなり。」

と述べた後、同じ御霊によつて、ある人には、智慧の言、ある人には知識の言、ある人には信仰（山を移すほどの特別なもの？）、病を癒す賜物、力ある業、預言、等々が与えられることが記されています。そして、人体が幾つもの「肢」から成つて一つの統一体を形成しているのと同様に、キリストの「体」である「集会」も、「肢」である各人が、互いに助け合い、補い合うことの大切さを説いています。即ち、

「もし一つの肢、苦しまばもろもろの肢ともに苦しみ、一つの肢、尊ばれなば、もろもろの肢ともに喜ぶなり。即ち、汝らはキリストの体にして、各自、その肢なり」

と。そして、続く13章では、有名な「愛の讃歌」が謳い上げられています。わたしたちの集会も、常に、この「原点」に立ち返りつつ、祈りを深めてゆきたいと願います。



真の食物（ヨハネ伝より）

2022年12月11日

「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」

と答えて、悪魔の誘惑を退けられた主キリストは、町に行つて食物を買い求めて帰つてきた弟子たちが、食物を差し出したのに対して、

「我には汝らの知らぬ我が食する食物あり。我を遣し給へる者の御意を行ひ、その御業を成し遂ぐるは、これ我が食物なり。」（ヨハネ伝4章34節）

とお答えになり、また、38年間の長きにわたつて病に悩んでいた人を安息日にお癒しになったイエスを、安息日の律法を破つたと非難するユダヤ人には、

「わが父は今にいたるまで働き給ふ、我もまた働くなり。」

とお答えになった。このように、主キリストにとつては、父なる神が一切であり、全存在を父なる神に託し、その御意のままに生き、動き、働かれた。

このように、全存在を父なる神に託しておられたキリストが語られた言葉、

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」

を私たちは全的に信受・体受したいと思う。しかしこの言葉を真に信受・体受するには、私たちが「新たな誕生」を経なければならぬ。それを可能とするために、主キリストは「命への道」となつてくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり、我に由らば誰にても父の御許に至る者なし。」

と語られた主キリストご自身が、十字架上の死をもつて「旧き我（罪なる自我）」を葬り去り、ご自身の「新しき命に生きる新しき我」を賜った。この「新しき我、霊なる我」は、

「神の口より出づる一つ一つの言葉（霊言）によつて生きる者」

とされている。わたしたちは、常に、「砕けの心、ひれ伏しの相」で生きることが大切である。イザヤ書57章15節の

「いと高く、その名を聖と唱えられる方は、同時に、いと低き、ひれ伏しの霊、砕けたる魂に宿り、これを活かし給う」

との預言の言葉は、主キリストによつて「現実」となった。わたしたちは、常に、「見えるところ、見える現実」を乗り越えて、「見えない、まことなるもの」を信受し、体受して生きる者でありたい。

「それ信仰は、（主キリストの御言葉、御約束に基づき）望むところを確信し、見ぬ物を眞實とするなり。」

とある通りで、主キリストは、必ず、この悲願・霊願に答えてくださる。このようにして、わたしたちは、聖歌49番「うたいつつあゆまん」の「主にすがる我に悩みは無し」（あれども無きがごとし）の心根で、襲い来る様々な困難・患難にもめげず、勝利と感謝の心で日々を過ごしたいと願う。

